

矢倉川中小河川改修に伴う
入江内湖西野遺跡発掘調査報告書

1977. 2

滋賀県教育委員会
財団法人 滋賀県文化財保護協会

矢倉川中小河川改修に伴う

入江内湖西野遺跡発掘調査報告書

1977. 2

滋賀県教育委員会
財団法人 滋賀県文化財保護協会

001.2
PH 27

序

入江内湖は琵琶湖第2の水面面積を誇る内湖であったが、戦前、戦後にかけての干拓事業によりその姿を没した。しかし、その工事に際して、多数の土器等遺物が内湖のほぼ全域にわたって出現し、内湖が古代遺跡の宝庫であることが知られ、早くから人々の注目を集めることとなったのである。

このたび、矢倉川中小河川改修工事に伴い、内湖の南端が河川の付替ルートに含まれることになり、事前に発掘調査を実施することとなった。本書は、その調査成果である。

湖北地方は、畿内、東海、北陸の3地方の結節点であり、この地域の古代史の解明は、これら周辺3地域の解明にも通ずるものである。とりわけ、入江内湖に係る遺跡は、その面積の広大さとともに、縄文時代から平安時代にかけての長期間にわたるものであり、これら遺跡の湖北地方で占める意義は大きい。今回の調査遺跡は入江内湖に係る遺跡の一部分であるが、この報告書によって、入江内湖、ひいては、湖北地方の古代史の一端を知る上に役立てば幸いである。

最後に、発掘調査および整理業務に日夜努力いただいた調査員、地元関係者の方々に感謝の意を表したい。

昭和52年2月

滋賀県教育委員会

教育長 中山 正

目 次

はじめに	1
1. 位置と環境	2
イ. 位置	2
ロ. 歴史的環境	2
2. 調査結果	4
イ. 調査経過	4
ロ. 調査結果	5
Ⅰ. 旧地形	5
Ⅱ. 堆積土層	5
Ⅲ. 遺構	6
a. 掘立柱建物	6
b. 溝状遺構	6
c. 貯藏穴？	8
d. ピット群	8
3. 遺物	9
イ. 遺物出土状態	9
ロ. 土器	11
Ⅰ. 第3層	11
Ⅱ. 第2層下部	18
Ⅲ. 第2層上部	22
Ⅳ. 第1層	30
ハ. 木製品	30
ニ. 石器	34
ホ. その他の遺物	34
おわりに	36

挿図目次

図1	遺跡位置図	3
図2	発掘地区割り図	4
図3	a-e 断面土層図	6
図4	遺構平面実測図及び発掘後地形測量図	7
図5	第2層下部遺物出土状態実測図 (1)	9
図6	同 上 (2)	10
図7	第3層木製品出土状態実測図	11
図8	第3層出土遺物実測図 (1)	12
図9	同 上 (2)	13
図10	同 上 (3)	14
図11	第2層下部出土遺物実測図 (1)	19
図12	同 上 (2)	21
図13	第2層上部出土遺物実測図 (1)	23
図14	同 上 (2)	24
図15	同 上 (3)	26
図16	同 上 (4)	29
図17	第1層出土遺物実測図 (1)	31
図18	同 上 (2)	32
図19	第3層出土木製品実測図	33
図20	石器・銅鏡・管玉・小玉 実測図	35

図版目次

図版1	遺構 (上) 遺跡全景 (北西より)	
	(下) 遺跡近景 (北より)	
2	遺構 (上) ピット群 (東より)	
	(下) ピット群 (南東より)	
3	遺構 (上) 柱根及び支柱根遺存状態	
	(下) 柱根遺存状態	
4	遺物 (上) 第2層下部遺物出土状態 (南より)	

- (下) 第2層下部遺物出土状態(南より)
- 図版5 遺物 (上) 第3層木製品出土状態
- (下) 第3層上器出土状態
- 6 遺物 (上) ピット内遺物出土状態
(下) ピット内木ノ実出土状態
- 7 遺物 施文のある土器
- 8 遺物 第3層出土木製品及び柱根
- 9 遺物 第3層出土木製品
- 10 遺物 石器及び管玉・小玉・銅鏡

例　　言

1. 本書は、滋賀県が施行する矢倉川中小河川改修工事に伴う人江内湖西野遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本調査は、滋賀県教育委員会の指導のもとに、滋賀県の委託により財団法人滋賀県文化財保護協会が実施した。
3. 調査および整理業務参加者は次のとおりである。

滋賀県教育委員会 技師 田中勝弘

財団法人 滋賀県文化財保護協会

事務局長 井上剛

事務員 桑原栄子・弓削美佐枝

調査補助員 林純・坂口勝彦・川上真成・
鈴木弘一・上羽基之・飯野清士・

南部基
(以上京都産業大学考古学クラブ)

米原町文化財専門員 碓崎文五郎・酒井源三・河内美代子

4. 本書報文及び作図は田中勝弘が執筆作成した。

はじめに

入江内湖は水面面積 2.8km²の琵琶湖第2の附属湖であったが、戦中から戦後にかけての干拓事業最盛期に干拓され、その姿を没した。干拓に際して、内湖が下上るにしたがい、湖底から多数の土器等遺物が露呈はじめ、そこに古代遺跡の存在することが周知されるようになったのである。露呈した遺物は、えてて、散逸し、破壊されてしまうことが多いが、地元の当時干拓土地改良区副理事長であり、考古学の分野にも造詣の深い磯崎文五郎氏の御尽力によって、これら遺物の採集、保管がなされ、遺跡の一端を今日に伝えてきたのである。

今回の調査は内湖の南端附近で、矢倉川中小河川改修に伴い実施したものである。弥生時代前期から古墳時代後期に係る諸遺物の包含層と古墳時代中期の建物跡を検出するという成果をあげた。入江内湖湖底に没した遺跡は、今回の調査地域である西野区に限らず、明神・丸殿・善積区等内湖全域に及ぶ広範囲に分布するものである。これら諸遺跡は干拓工事により破壊されたように受けとれるが、しかし、今回の調査結果は、逆に、内湖に分布する諸遺跡が現水田下に保存されている可能性の強い事を如実に示すものであった。今回の調査地域については、矢倉川の改修が、昭和28年の13号台風、昭和34年の伊勢湾台風等により示されたような氾濫とその内湖干拓地域への被害を防止するものであり、工事による遺跡破壊を余儀無くされたが、今後、内湖干拓地域への開発には充分留意しなければならない。

なお、最後になったが、地元町文化財専門員である磯崎文五郎・酒井源三・河内美代子各氏には調査員として、調査に関して種々御協力いただいた。又、枝折、下丹生、上丹生の方々には遠隔な地でありながら御協力をいただいた。さらに、地元教育委員会、県河口課、彦根土木事務所の方々にも多大な御援助をいただいた。ここに記して謝意を表します。

1. 位置と歴史的環境

イ. 位 置 (図1)

今回の調査地域は、行政上、坂田郡米原町磯野に当る。琵琶湖第2の水面面積を誇っていた旧入江内湖の東南端に位置する。内湖の南側は、南西部を標高 162m の磯山の低丘が横たわり、南東部を佐和山等の丘陵の北端部が占める。矢倉川は、現在、内湖の南東側で西流し、佐和山丘陵の北端部を通って磯山の南丘端に沿って外湖に開口している。調査地域は佐和山丘陵の北端部に当り、矢倉川の北岸に位置するが、旧矢倉川は、本末、調査地域の北側で内湖に開口しており、この地域は砂礫で旧矢倉川の形成したデルタ地帯であることが知られている。また、内湖の南側 3 分の 1 程はスクモ地の泥炭層で、北側半分の湖底の土地条件と異り、内湖盆 2 として区別される。すなわち、今回の調査地域は、旧地形では、旧矢倉川の形成するデルタ地帯の南側にあって、泥炭層よりなる内湖盆 2 の南東岸辺附近に立地していることが知られる。

註 小谷 昌「琵琶湖の湖底地形およびその環境」(『琵琶湖国定公園学術調査報告書』昭和46年)

ロ. 歴史的環境

旧入江内湖及びその周辺には内湖の形成と非常に関連の深い多くの遺跡が分布する。内湖の北方 1.5kmあたりには天野川が西流し、外湖に開口しているが、その旧河道は上多良、中多良、下多良の各集落の東側を南流して内湖に流入していたようであり、現集落はその自然堤防上に位置していると考えられる。この現集落附近に中多良遺跡、立花遺跡、下定使遺跡、中多良入江内湖辺遺跡等が分布し、弥生式土器、石器、須恵器、万年通宝等の出土をみている。また、天野川河口南側の朝妻筑塁から磯山の北側にかけての湖岸は内湖と外湖を界する浜堤であるが、やはり、天野川河口遺跡、筑摩湖岸遺跡、磯湖岸遺跡がこの浜堤上に立地している。旧入江内湖に限って見た場合、今回の調査地域をも含めた西野地域をはじめ明神、丸坂、善積等ほぼ全城に及んで遺物が採集されている。造物は縄文時代から平安時代にかけての土器、土製品、石器、木製品と多様であり、およそ湖面下 1.8m あたりから多くが採集されたと伝えられている。詳細は明瞭でないが、いわゆる古式土師器は西野地域での採集が多く、古式の須恵器類はさらに北方でその多くが採集されており、内湖内の遺跡が単純なものでないことを示している。内湖及びその周辺遺跡の実態については多くが不明瞭である。しかし、今回の調査結果をも踏まえて、内湖の盛衰とともに、そこに幾多の遺跡の消長があったことは確実であり、今回の調査によって、遺構の確認、遺物包含層の実態を把握し得たことは、今後の内湖関連遺跡の性格等を解明していく上での一助となろう。

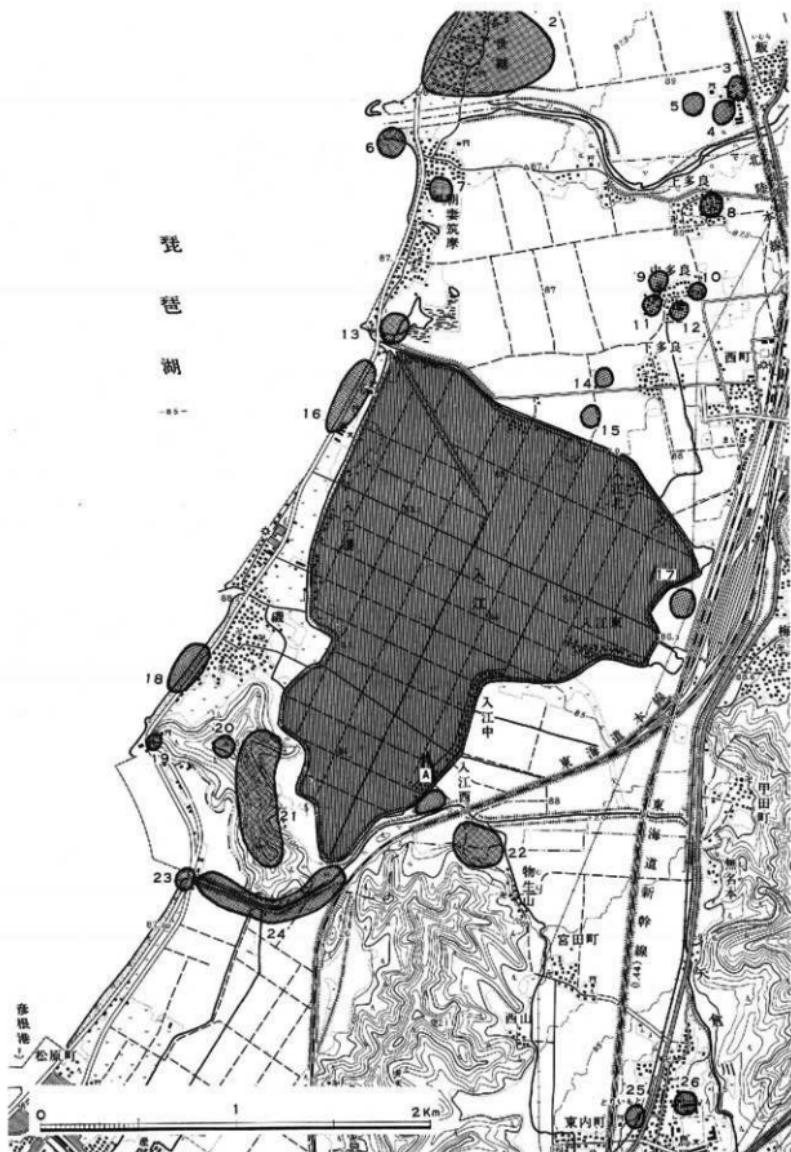


図1 遺跡位置図

- | | | | | | |
|----------|----------|-------------|-----------|-------------|------------|
| 1 桂林寺遺跡 | 2 世羅遺跡 | 3 地藏堂遺跡 | 4 正惡寺遺跡 | 5 菩提庵遺跡 | 6 天野川河口遺跡 |
| 7 朝雲城遺跡 | 8 本願寺遺跡 | 9 立花遺跡 | 10 中多良遺跡 | 11~12 蘭華寺遺跡 | |
| 13 今江寺遺跡 | 14 下定使遺跡 | 15 內湖迎遺跡 | 16 筑摩湖岸遺跡 | 17 米原駅西遺跡 | 18 碓湖岸遺跡 |
| 19 磐峰遺跡 | 20 碓山城遺跡 | 21 堂谷遺跡 | 22 物生山遺跡 | 23 矢倉川河口遺跡 | 24 矢倉川河底遺跡 |
| 25 石塚遺跡 | 26 四ノ日遺跡 | A 西野遺跡(調査地) | | | |

2. 調査結果

イ. 調査経過(図2)

以下に個条書きして調査経過にかえる。

- 米原町教育委員会、町文化財専門員等とともに現地予察。遺跡の現況観察、作業工程等打合せ。

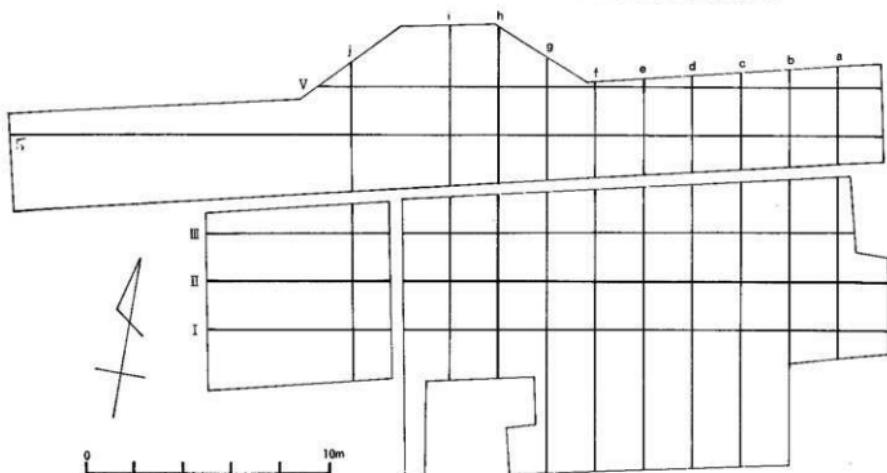


図2 発掘地区割り図

- 器材搬入。遺跡現況写真撮影。
- 4m×20mトレンチを2カ所に設定し、発掘範囲を確認。
- 発掘範囲全面の表土を除去。搅乱層であるが、弥生時代から古墳時代にかけての多量の土器、石器等出土。
- 表土より下層を掘り下げ、調査地域南西部で旧陸地面を検出。断面土層を確認したうえで、表土下面から旧陸地面までの堆積土を第2層とした。
- 旧陸地部でピット等遺構を検出。また、旧陸地部を囲んで弧状に遺物の集積帯を検出。第2層下面、第3層上面にあって、第2層下部として区別し、写真撮影、実測後に取り上げ。
- 遺構の掘り下げ。柱根、小玉、木ノ実等を出土するピット等検出。
- 旧内湖内堆積土の掘り下げ。土器類とともに、特に陸地部の北側で下方部より木製品が多量に出土。
- 旧内湖内堆積土の層序判然とせず、第3層の一層として遺物取り上げ。

- 第3層下面は青灰色粘土層を検出し、内湖底であることを確認して発掘作業終了。
- 発掘後の写真撮影、旧地形測量、遺構等の実測完了。
- 器材、遺物等の運搬を終って調査を完了。

口. 調査結果

I. 旧地形

調査地域は旧入江内湖に小さく舌状に張り出した湖岸辺であった。発掘後の地形測量では北方に張り出した等高線図が得られた。また、標高84.6m以下では旧地表は青灰色粘土であり、以上では淡黄褐色の乾固な粘質土であって、およそ、標高84.6mを境にして以下が旧内湖底、以上が旧陸地面であったことが知れた。現矢倉川は調査地域の南方にあって南流しているが、本来、調査地域北方にあって内湖に開口していたようであり、北方に砂礫による旧矢倉川の形成したデルタ地帯がある。調査地域はその南端附近に当るが、調査結果よりみる限り、そのデルタ地帯からははずれている。現地形では、調査地域の西側で佐和山丘陵の一枝丘の山塊が国鉄東海道線及び現矢倉川によって切離された状態で残っており、むしろ、調査地域は佐和山丘陵が内湖に張り出したその末端微高地に当るものと思われた。小谷昌氏によると旧入江内湖は琵琶湖への流入河川により、部分的に堆積されて多数の内湖群が形成され、内湖底の地形及び土地条件が大別して5類に色分けできるという。調査地域では、^註旧内湖底部分に厚い黒色の泥質土（いわゆるスクモ地）の堆積があり、小谷氏による内湖盆2に当ることが知れた。

II. 堆積土層（図3）

旧内湖部分（標高84.6m以下）では青灰色粘土、旧陸地部分では淡黄褐色の粘質土が地表面を形成している。その上面には旧内湖部分に3層、旧陸地部分で2層の堆積土がみられた。耕作土下の第1層及び第2層は黒色の砂質土上、多量の遺物を包含している。この2層は旧内湖部分にも及んでいる。旧内湖部分では、さらに、黒色の泥質土、いわゆるスクモの堆積があり、まさに内湖底の様相を呈していた。この第3層も遺物の包含層であり、特にその下半分から木製品の出土をみていている。第3層は旧湖底面の深度が増すごとに漸次厚さを増すが、遺物の包含量は逆に漸次減少し、調査範囲内では、およそ標高84.3m線が限界で、以下ではほとんど遺物の出土をみていない。

遺構は、旧陸地部分にあって、旧内湖部分では第3層上面から切り込んだ数個のピットが検出されたことにとどまった。また、第2層下面、すなわち、第3層上面にあって、およそ、標高84.5m線に沿って、旧陸地部分を囲むように、幅約3m程の凹地が見られた。この凹所内に比較的時間的バラつきの少ない土器類の多量の集積があった。凹地は第3層を切り込んだという程のものではなく、自然に集積したものと思われ、また、第2層とは区別し得て、かつ、第3層上面にあるところから第2層下部として層位を区別した。

以上より、第3層は旧内湖底に沈積したスクモ層であり、第2層は旧内湖の陸化後（少なくとも泥湿地化後）に堆積したものと思われる。遺構は、一部第3層を切り込んだピットがみられるところから、内湖が泥湿地状態にある時点に形成されたものであり、第2層下部もその時点で多量の土器類を伴って堆積したものと思われる。

なお、第1層は矢倉川新堤防工事等の際に擾乱された部分である。

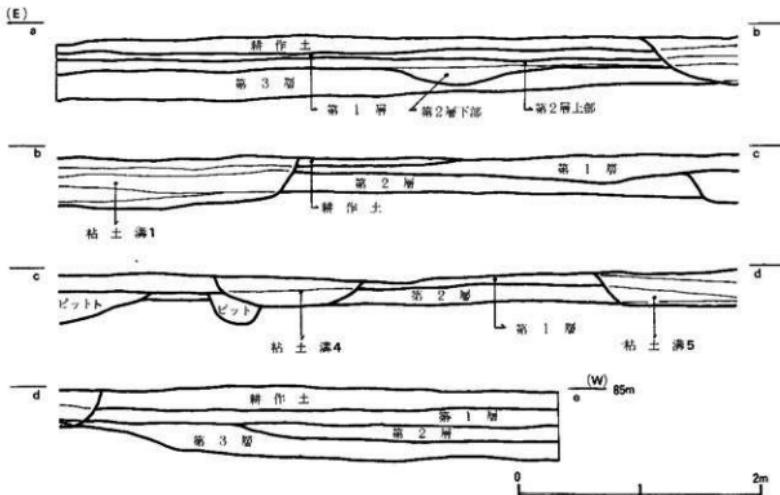


図3 a—e 断面土層図 (図4 参照)

III. 遺構 (図4)

遺構は旧陸地部分に限られ、掘立柱建物、貯蔵穴(?)、溝、ピット群等を検出した。

a. 掘立柱建物

3棟分検出している。

T1は3個の柱穴列を検出した。E9度Sの傾きを持って南方へのびるようである。柱間は $1.9m \times 1.9m$ の等間隔で、うち、東側2個の柱穴には柱根の遺存をみた。柱根は径約17cmと15cmで、下端は粗切りし、側面は面取りしている。

T2では柱間 $2.65m \times 2.65m$ の東西に並ぶ3個の柱穴とその西端から同間隔にあって直交する1個の柱穴が遺存している。やはり南側にのびるようであり、東西の3個の柱穴列はE15度Sの傾むきを持つ。

T3は4個の東西に並ぶ柱穴列で、柱間は、 $0.9m$ で等間隔。南方へのびるようで、柱穴列の傾きはE6度Nである。

b. 溝状遺構

6条ある。東端のM1は幅20~46cmで、およそN10度Wの傾きを持ち、ほぼ直線的。深さ約6cmで、横断面皿状を呈す浅い溝。ピット1個を切っている。

M2は幅約30cm、N65度Wの傾きを持つ。長さ3m弱で、深さ約7cmのU字形の溝。4個のピットが切り込んでいる。

M3は幅約58cm、長さ約4mで、不整形である。深さ約5cmと浅く、T2の柱穴が切り込んでいる。

M4は幅16~38cmの弧状の溝。T2、T3の柱穴によって切り込まれている。

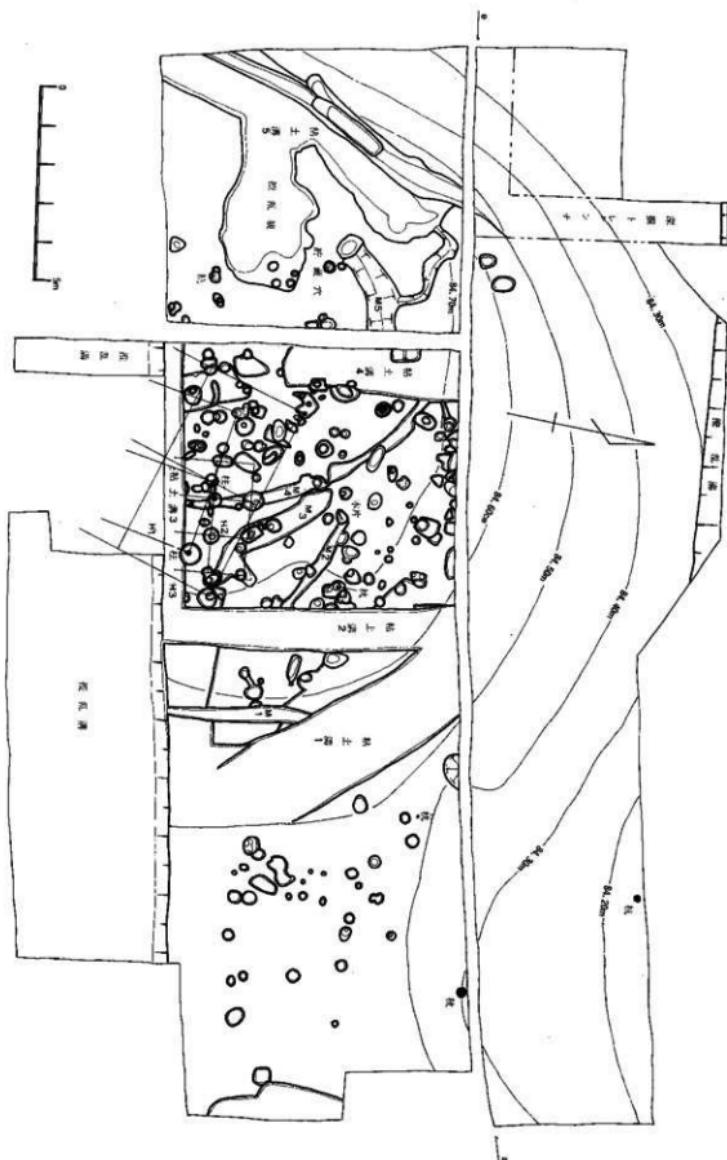


図4 造構平面実測図及び発掘後地形測量図

M 5 は幅70cm。溝底皿状のもの。

M 6 はやや蛇行するが、およそN20度E方向にのび、横断面U字形の素振りの溝。幅40~70cm、深さ約20cmで、旧内湖に向けて開口している。また、溝底に幅50cm、長さ2.15m 深さ約15cm の長方形の土壙があった。

c. 貯藏穴(?)

M 5 の南側にあって、径28cm、深さ22cmの柱状のピットの途中深さ5cmで木の実の集積をみた。貯藏穴と呼ぶより、むしろアクリ抜きのピットか。

d. ピット群

旧陸地部分から一部旧内湖部分にかけて多数のピットを検出した。うち2個から細杭が、また1個から木片の出土を見た。また、小形丸庭壺の比較的大型の破片を出土したもの、小玉を出土したもの等がある。その他、土師器の細片を出土したものは多数あるが、細片で形状を判別し難く、特に意図的に埋め込んだ状態ではなかつた。また、T 1~T 3 の掘立柱建物と思われるものを除いて、規格的な配列を見出せない。

註 小谷 昌「琵琶湖の湖底地形およびその環境」(『琵琶湖国定公園学術調査報告書』昭和46年)

3. 遺物

イ. 遺物出土状態(図5・6・7)

旧陸地部から旧内湖にかけて、耕作土を除いて2~4層にわたる土の堆積が認められ、各層に多量の遺物を包含していた。各層は一応時間的な差異を示すが、包含される遺物については、各層とも單一時期の一括遺物とし

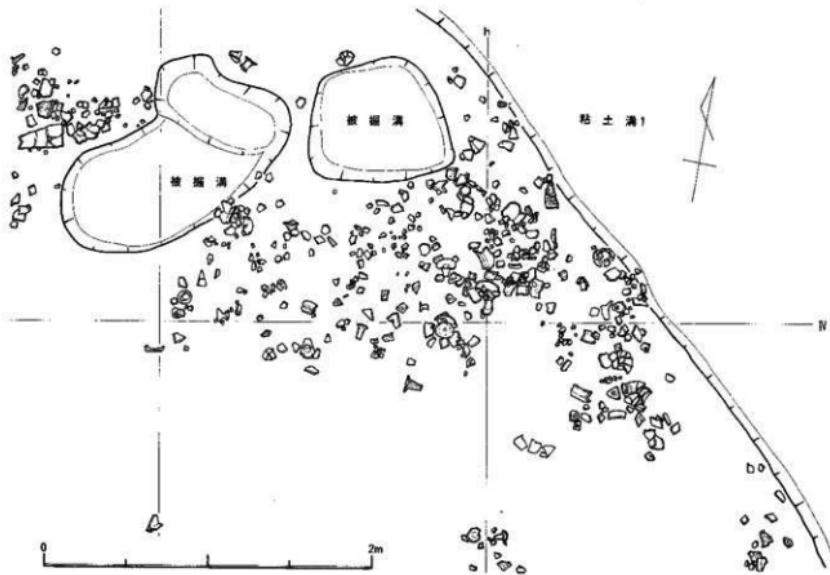


図5 第2層下部遺物出土状態実測図1)

て扱い得る状況ではなかった。ただ、大雑把な特徴として、上方の第2・第1の2層からは、いはゆる古式土師器と少量の弥生式土器とともに須恵器を伴出した。第1層は耕作や重機による整地の際に擾乱された部分である。第2層は旧陸地部から旧内湖にかけて全面にわたる堆積土であり、砂礫を含む黒色土である。下方の第2層下

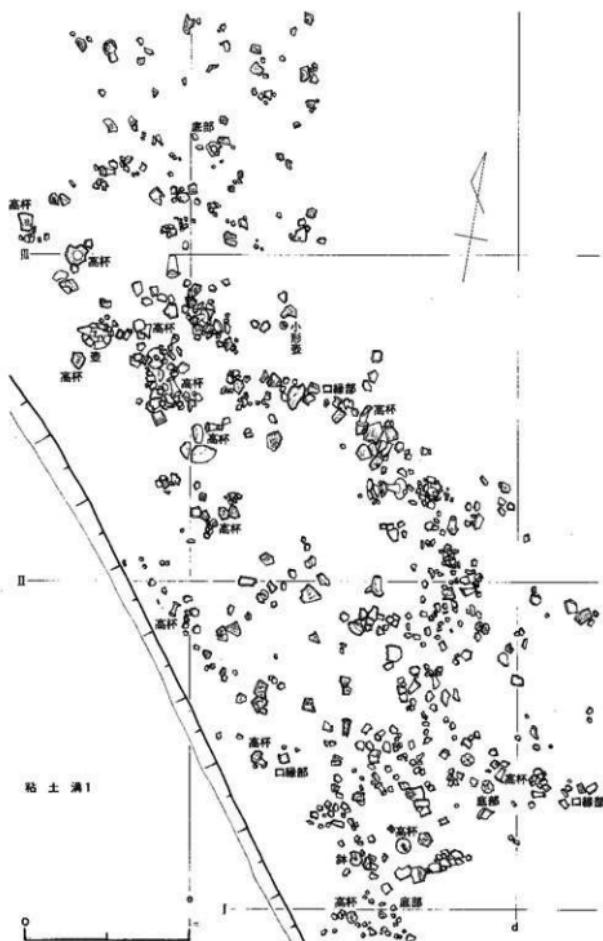


図6 第2層下部遺物出土状態実測図(2)

定は困難である。

遺構での遺物の出土状態は良好でない。掘立柱建物及び多数のピットからは土師器の細片を出土しているが、

部及び第3層では、須恵器は皆無である。第2層下部は旧陸地部と旧内湖との境界附近の堆積土であって、遺物の時間的なバラつきの最も少ない包含層である。やや砂質の黒色土であって、旧陸地部の造構の年代と並行するものと考えられた。いわゆる布留式土器を主体としており、須恵器を共伴しないところから、当地方における須恵器出現直前の様式を示すものとして注意される。第3層は黒色の泥質土であって、旧内湖内の堆積土である。第1様式の弥生式土器から布留式土器まで含み、最も時間的なバラつきの激しい包含層である。ただ、弥生式土器は比較的下方部から出土することが多い。また、第3層からは多量の木製品の出土を見た。木製品も下方部に多くが包含されていたが、弥生式土器の他に布留式土器をも出土しており、その年代の確

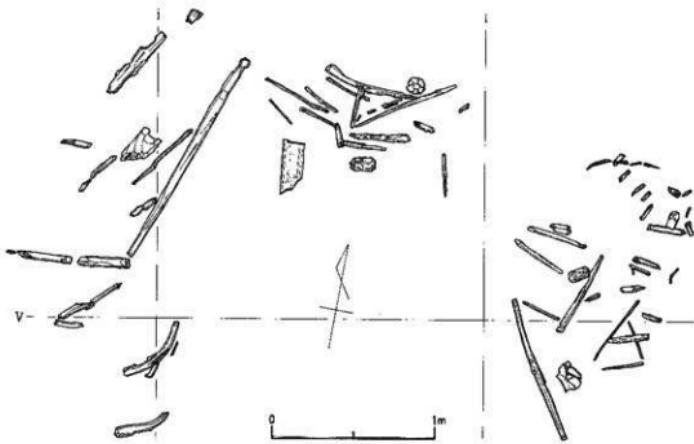


図7 第3層木製品出土状況実測図

器形、年代を知るまでに至っていない。ただ、1坑のピットにおいてのみ小形丸底壺形土器1点を出土しており、唯一の年代資料である。その他では、木の実、小玉を出土しているピットがある。

口. 土 器 類

I. 第 3 層

〔変形土器〕

a. 土師器

口縁部が単純に終るものと一括して一類とするとA～E類の4類に区分できる。

A類はいわゆるS字状口縁をなすもので、口縁部の形態によって、さらに、6類に分けることができる。

I類(図8-11～17)は口縁部外面に範状工具による平行沈線文を施すもので、頸部は屈曲して水平近くに開き、口縁部は屈曲して垂直に立ち上る。口縁端部は面を取って水平である。器壁に厚味があり、肩部以下外面を施描きしているものが多い。

II類(図8-1～3)は口縁端部を折り曲げたように極端に屈曲させて外方へ引き出している点特徴的である。頭部は「く」の字形にカーブし、口縁部は開く。3には体部外面に刷毛目調整痕が残る。

III類(図8-4～6)は「く」の字形にカーブする頭部から屈曲して内窪しながら開く口縁部を持つもので、口縁端部は丸く仕上げている。いずれも体部外面に刷毛目調整している。

IV類(図8-8・9)は形態上I類と近似していて無文のものである。

V類(図8-7・10)は「く」の字形にカーブする頭部と外方へ開く口縁部を持つもので、口縁部に面を取るが水平及至内傾する。口縁部と頭部との境界の屈曲の小さいものである。

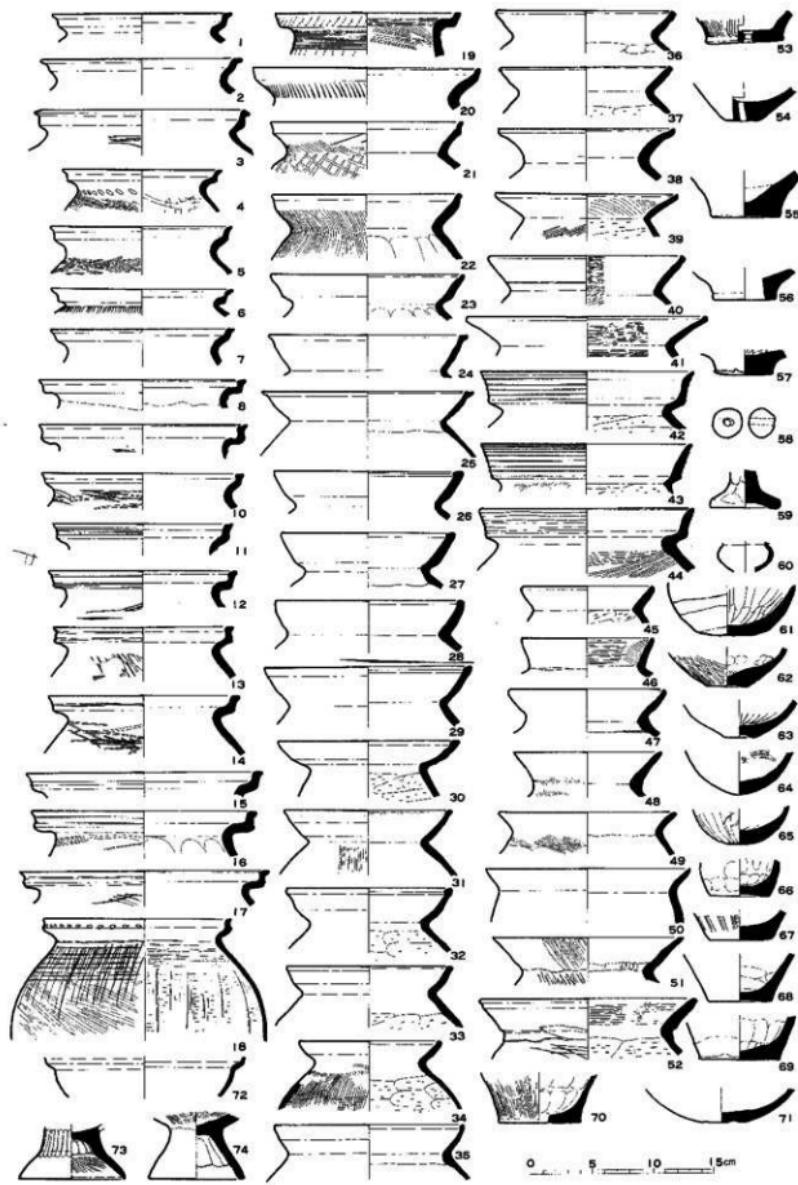


図8 第3層出土遺物実測図1)

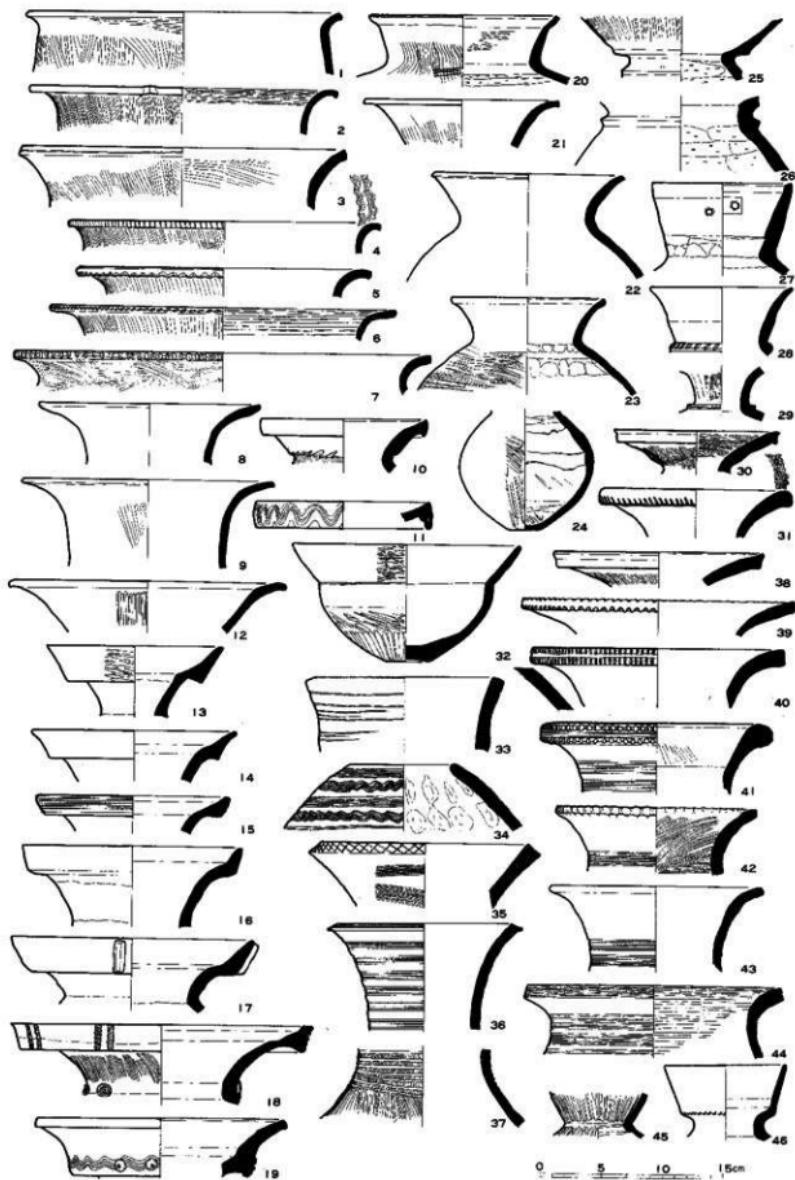


図9 第3層出土遺物実測図(2)

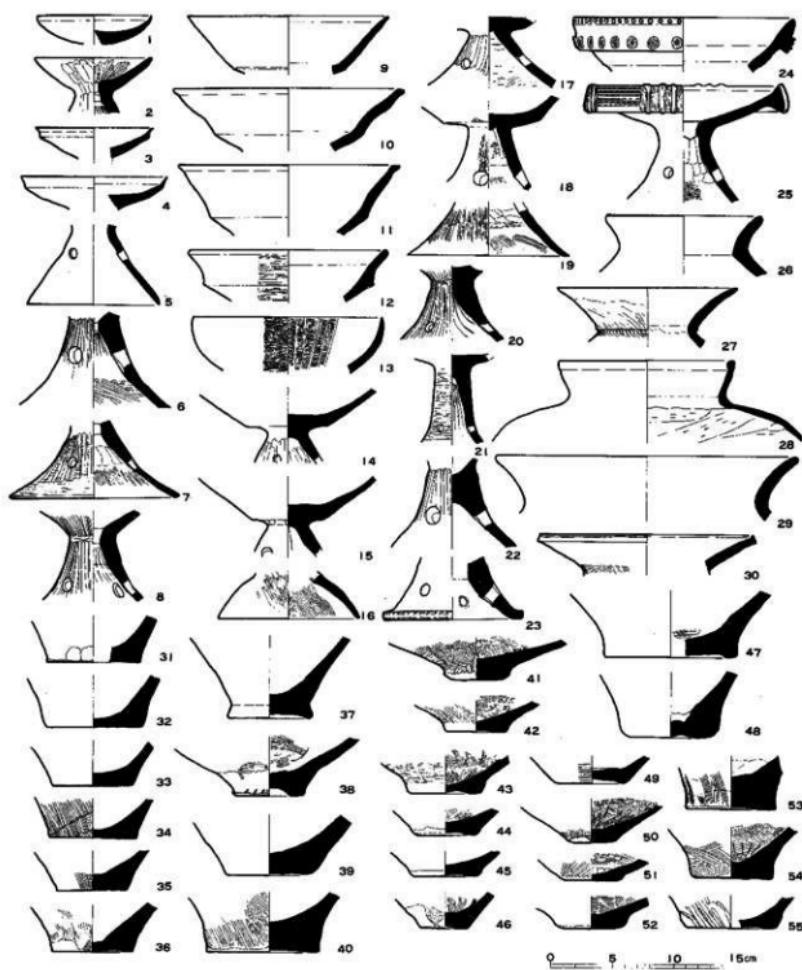


図10 第3層出土遺物実測図(3)

V類(図8-18)は水平に開く頸部から斜く稜を取って、内弯して立つ短かい口縁部を持つ。口縁部は面取りし、口縁部下端に刺突文をめぐらす。器壁は非常に薄く、体部外面は刷毛目調整後に籠描きし、内面は縱方向に籠削りしている。

B類は「く」の字形の頸部と外弯してその端部を肥厚させた口縁部を持つもので、いずれも体部内面を籠削りして器壁を薄くし、外面を刷毛目調整している。また、口縁部は横ナデして整えている。硬質で、すべてに煤が付着している。これらは、口縁端部の様子によって5類に区分できる。

I類(図8-24・25)は端部を折って外方に引き出している。

II類(図8-26・27・29~31)は端部を内側へ横断面三角形状に肥厚させ、水平及至やや内傾する面を取る。26・27は頸部を指で押えて凹ませ、口縁部との境界に稜をつくっている。29・30は口縁部の中程でわずかに屈曲している。また、31では口縁部はスムーズに外弯しているだけである。

III類(図8-33~35)は端部を丸くおさめている。

IV類(図8-28・36・37)は口縁部が心持ち外弯する程度であり、端部の肥厚も小さい。端部は面を取るが28は水平、36・37は外傾する。

V類(図8-38)は口縁部が直線的で大きく開き、端部は面を取って外傾し、突堤状に内側に肥厚する。I~IV類とは形態上異なるものであろう。

C類は複合口縁部を持ち、いずれも口縁部は外反していて、端部は尖る。頸部との境界の稜も比較的明瞭で、図8-42・43では口縁部外面に7・9条の凹線文を施し、体部内面を籠削りしている(I類)。図8-44は構造まで7条の沈線を施し、体部内面を刷毛目調整している(II類)。

D類(図8-20~22)はS字状に近い口縁部を持つもの(20・21)と短かく直線的に開くもの(22)がある。いずれも体部外面を刷毛目調整しているが、21ではその後に格子状の籠描きをしている。

E類(図8-45~52)は「く」の字形に開く頸部に単純に開く口縁部を持つもので、45・46は短かく、あまり開かない。49・50も同様であるが口径が大きい。いずれも端部を丸くおさめている。51は端部を水平に面取りし、47は外弯させた口縁部を持つ。

b. 弥生式土器(図9-1~7)

2・4・5は口縁部が大きく外反し、端部をわずかに垂下させる。2の口縁部は無文であるが、注口状の押えがみられる。4には刺突列点文をめぐらし、5には口縁部下端を刻んでいる。いずれも口縁部以外の外面に縱方向の刷毛目があり、2では口縁部内面に横方向の刷毛目が施されている。

1は口縁部が「く」の字形近くにカーブして開き、その端部をやや肥厚させて面を取る。体部は上半部でわずかに張るようである。口縁部外面に横方向の刷毛目が残り、頸部は、ナデて消している。肩部以下にも刷毛目がのこる。

3は口縁部がゆるやかに大きく開き、その端部に面を取って、1条の籠描き沈線がめぐる。頸部以下の外面に刷毛目が残る。口縁部内面をも刷毛目調整している。

6は屈曲してやや斜上方に開く口縁部を肥厚させ、その端面に刺突文をめぐらす。頸部以下に刷毛目、口縁部内面に横方向の深い刷毛目がのこる。

7は外反した口縁端部に刻みを施す。体部外面は口縁部以下に斜方向の刷毛目調整を施す。

[菱形土器]

a. 土師器

広口壺形土器で口縁部に特徴のあるものとしてA～Eの5類がみられる。

A類(図9-13・14・16・17)は口縁部が屈曲して斜上方へ開く。無文のものが多いが、口縁部の外面に棒状の浮文を施したもの(17)がみられる。13は他と異り細頸で、口縁部外面に範磨き調整痕が残る。

B類(図9-15・18)は大きく開いた口縁端部を上下に肥厚させて幅広い面をとるもので、15には7条の平行沈線、18では2箇一対の浮文を施している。18ではさらに、頸部に竹管を押した円形浮文を配している。

C類(図9-19)は頸部の遺存はないが、およそ、外側へカーブして開きながらのびるようであり、口縁部は段をなして強く外反する類である。口縁部の下端を下方へ垂下させて突帯状となし、この部分に波状文、さらに、円形浮文を配している。

D類(図9-25・26)は口縁部等の形は明らかでないが、頸部に角張った突帯をめぐらすもの。ともに体部内面を箒削りしている。

同じ突帯をめぐらせるものに28・29があるが、28は口縁部が上半分で外反し、頸部の突帯に刻みが施されている。29は口縁部が大きく外反する。

E類(図9-10・30)は「く」の字形に開く頸部と口縁端部を上下に肥厚させたもの。10は体部外面に、30は口縁部の内外面に刷毛目調整痕をみる。

以上の他に、簡単な「く」の字形の口縁部を持ち、無文のもの(F類—図9-20～24)がある。

20は肩部の張りが大きく、口縁部はその端部付近で屈曲させて外方に開く。口縁端部は面を取る。頸部以下の外面及び口縁部内面を刷毛目、体部内面を箒削りして調整している。

21は外反して大きく開く口縁部でその端部を上下に肥厚させている。

22は球体の体部にやや外反気味の口縁部を持つ。口縁端部はやはり面を取る。

23は22と同じ器形と思われるもので、口縁端部は上方に肥厚している。体部外面は刷毛目、内面は指揮痕がみられる。

24は球形の胴部に小さな平底の円底を持つ。体部外面は範磨きして調整している。

なお、複合口縁部を持つ図9-46(G類)は、口縁部が筒状で、開きは大きくなない。また、口縁部下端に調整上の刺突がみられる。

b. 弥生式土器(図9)

前期から後期のものまでみられる。

前期のものとしては37の頸部付近の破片がある。刷毛目調整した後に、頸部からナデ肩の肩部にかけて、遺存数7条の箒描き直線文が施されている。

中期のものとしては、35・36・41～43等で35は逆ハの字形に開いた口縁部で、厚味のある器壁で、口縁端面に格子状に箒描きし、口縁部外面に箒描きの直線文を施している。

36はゆるく外反する丈の高い口縁部の外面に4条の箒描き直線文を等間隔に6条以上配したもので、口縁端部は肥厚して面を取り、やはり4条の直線文が施されている。

41は口縁端部を丸く肥厚させ、その上下端に刻みを施す。その間に、直線文が3条のこっている。直線文は、口縁部の内側上面及び口縁部から頸部にかけて5条のものが施されている。

42は短く外反する口縁部で、頸部に6条の直線文が走る。口縁端部外面は押えて凹面となっている。

43も単純に開いた口縁端部をさらに外反させたもので、頸部に5条の直線文が残る。

これらの壺形土器の他に、無頭の台付壺形土器になるとと思われるもの(34)がある。口縁端部は丸くおさめただけで、体部外面には6条の直線文と波状文とを交互に配している。

後期のものとしては長頸壺形土器(8・9・12)と広口壺形土器(11・31・38~40)等がある。

8・9・12は口縁部が大きく、上端が大きく外反する。頸部は筒状で長い。9に刷毛目、12に窓調整痕がある。

31・38~40は大きく外反した口縁端部を肥厚させて面を取る。31は口縁下端を刻み込み、内面に波状文を施す。39では口縁部の上下端を刻み、40は刺突文をめぐらす。38は無文である。

11は口縁端部を下方へ垂下させて幅の広い面を取り、波状文を施している。

これらの他に直口形の器壁の厚いもの(33)がある。外面に粗雑な窓描きの直線文がある。

〔鉢形土器〕

a. 土師器(図8-72)

1点のみある。口縁部が二段に屈曲して外上方に開くもので、器壁は薄い。

b. 弥生式土器(図9-32)

内側にカーブしながら開き、頸部内面に接を取り、底部に至る。底部は上底ふうのものである。口縁部外面は横、体部下半は斜方向、底部付近は縱方向に窓磨きして仕上げている。

〔器台形土器〕

a. 土師器(図10-1~5)

小型のもので、漏斗状に開く杯部を持つもの(A類-2)と口縁端部が屈折して立ち上るもの(B類-1・3・4)とがある。

A類は内外面窓磨きし、器壁も厚みがある。

B類では、1は口縁端部の屈折部の綫は不明であるが、3・4では屈折して外反し、端部は尖る。

脚部には、小型器台のものと思われるものが1点(5)ある。心持ち内側へカーブしてハの字形に開くもので、端部は丸く終る。やや上方部に3個の円孔を穿っている。

全体に鼓形を呈すると思われるもの(8)がある。杯部、脚部とも細かく窓磨きし、脚部に6個の円孔を穿つ。その他、器台形土器の脚部と思われるものが2点(6・7)あるが、ともに、内寄して開き、7では端部は平坦な面を取る。ともに外面を窓磨きしている。また、ともに3個の円孔を穿つ。

b. 弥生式土器(図10-24・25)

24は杯部の口縁部を幅広くとり、上端に竹箒文を施すとともに、下端に円形浮文を貼り付けている。杯部は椭形の比較的深味のあるものである。

25は口縁端部を上下に肥厚させて幅広くし、その外面に6条の横描直線文と3本の棒状浮文を4対配している。脚部は内寄気味に開き、3個の円孔を穿っている。脚裾部内面に刷毛目調整痕がある。

これらはともに弥生時代後期に位置付けられよう。

〔高杯形土器〕

a. 土師器

杯部で口縁部と底部とが接を取って接続するもの(図10-9~11)がある。10は口縁部が直線的で、端部は内

外から指で押えて整えている。

10・11はともに、口縁部の内外面に指押えによる凹凸があり、口縁端部は外方へ肥厚させて面を取る。

図10-14・15及び17・18は杯部の口縁部と底部との境界の稜が鋭く、脚部は内寄して大きく開く。いずれも脚部外面を箆削りあるいは磨いており、3個の円孔を穿つ。

その他、脚部が外弯するもの(図10-16)、筒状の脚柱部で、その外面を横方向に刷毛目を施すもの(図10-21)等がある。

b. 弥生式土器

図10-23は器壁に厚味があり、器端部は大きく外反させ、端部に面を取って上下端に刻みを施している。4個の円孔を穿っている。

(甕形土器)

図8-53・54の2点ある。ともに平底のものに1孔を穿ったものである。

(その他)

甕形土器の脚台と思われるもの(図8-73・74)は2点と量的に少ない。73は下半分を屈曲させて内側にカーブさせながら開き、端部は丸く仕上げている。上半分外面を箆削りしている。74は比較的丈が高く、心持ち外弯気味に開く。端部は水平な面を取る。

図8-58の土錐、図8-60の小型の甕形土器等がある。

壺あるいは甕形土器の底部と思われるもの(図8-61~71)で、丸底のものが図8-65、丸底であるが尖底氣味のものが図8-64、痕跡程度に平底としている図8-71の他はすべて平底である。

II. 第2層下部

(甕形土器)

a. 土師器

甕形土器はすべて土師器であるが、第3層に比べてC類の出土がなく、また、D類も1点を示し得たにとどまる。S字状口縁のA類には第3層出土のⅢ類及びⅥ類がなく、逆に、短かく開く口縁部にほとんど屈曲がなく、内外面を指押えしただけのもの(V類(図11-19・20))が新たに加わる。V類はともに頸部が「く」の字形に開き、肩部の張りも弱い。

I類は口縁部外面の平行直線文の上に棒状の浮文を貼り付けたもの(図11-31)で、体部外面は、やはり、箆描きしている。口縁端部の屈曲は第3層のものに比べて大きい。

II類は量的に最も多く(図11-21・22・26~28)。口縁端面は水平及至斜上方を向く。

IV類は図6-29の1点のみ示し得た。口縁端面がやや凹み、体部外面は刷毛目調整している。

V類はII類に次いで多いが、II類のうちでV類に含めてよいものもあるが、判然としない。

第2層下部出土のA類甕形土器は以上のように、V類の新たな出土とII類及びV類の量的な増加という傾向がうかがえる。

B類甕形土器もA類とともに第2層下部では主流を占めるものである。第3層に対して、I・IV・V類の出土をみない。III類についても、図11-14・16で口縁端面幅が狭く、器壁の薄いものを見るが、II類に含めてよからう。

II類(図11-2~6・8・11・13・15・17)が最も量的に多い。いずれも口縁部外面が屈曲する。15では肩部

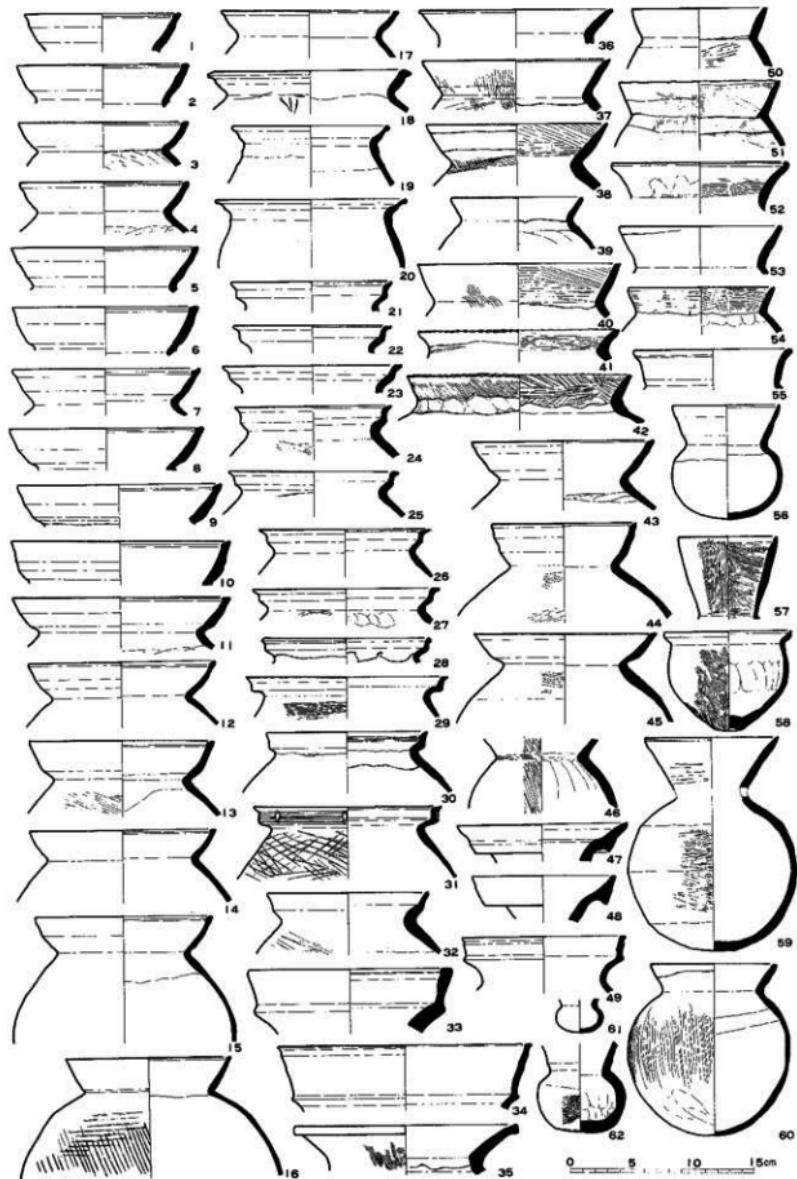


図11 第2層下部出土遺物実測図1)

の張りが比較的弱くナデ形であり、上記の16では肩部が良く張り、球形の体部を持つようである。また16では体部外面をカキ目様の深い刷毛目模がみられる。

第2層下部では、第3層ではみられなかった口縁端部の肥厚部の内傾が長くなり、幅の広い面を取るもの（Y類（図11-1・7・9・10・12））がある。口縁部外面が凸凹し、2～3本の棱を取るものが多い。7では口縁端面が凹む。

D類（図11-32）は図示し得たものは1点のみで、口縁部は内窪して開き、端部は丸く仕上げている。

E類（図11-36～45・50～55）にはB類に近似して、「く」の字形の頸部と内側にカーブしながら開き、端部に面を取るもの（43～45）が見られる。体部外面を刷毛目、内面を施削りし、口縁部の外側が棱を取って凸凹面をなす等B類と同様であるが、口縁端部は肥厚しない。

41・42は「く」の字形に短く開く口縁部で、端部に面を取り、刺突している。ともに口縁部の内面を刷毛目調整している。また、41では口縁部の貼り付けの痕跡がのこり、42では頸部に補足粘土の貼り付けがなされている。

36は口縁部の開きが大きく、端部を外反させている。

37・40は「く」の字形に開いた口縁端部に面を取り、頸部内面が棱を取って屈曲する。ともに体部外面を刷毛目調整し、頸部内面に口縁部の貼り付痕がよく残っている。40では口縁部内面をも刷毛目調整している。

38は口縁部が尖り気味に終るもので、口縁部の端部付近と頸部付近に貼り付痕がのこる。口縁部内面を刷毛目調整、頸部以下の外面も刷毛目調整しているようである。

39・50・54は開きの小さい、短かい口縁部を持つ壺形のもので、39・54は口縁端部を丸く、50は面を取っている。50・54では口縁部内面に棱を取り、39・50の体部内面は施削りしている。55の口縁部内外面は刷毛目調整している。いずれも口縁部の貼り付け痕跡がよくのこっている。

51は50に良く似た器形であるが、口縁端部が凸凹している。

52は口縁部が外反して開き、端部を内側に肥厚させている。口縁部内面は刷毛目調整。

53は口縁端部付近で内側にカーブし、55は外反する。

〔壺形土器〕

a. 土 師 器

広口壺形土器では、A類（図11-47・48）がある。ともに口縁部の屈曲部が突帯状に棱を取る。ともに無文である。

B・C・D・E類の器形の出土はなく、第2層下部では、新たに、口縁部が二段に屈曲するもの（G類（図11-33・34・49））と小形丸底壺（H類（図11-56・61・62））が出土している。

G類の33は、口縁部がやや開き気味に立ち、端部は凹む。内外面をナデしており、屈曲部付近は指で押えて薄くなっている。また、内面端部付近が凹線状に凹む。34・49はともに薄手で、屈曲部が突帯状に棱を取り、口縁端部が外方へ肥厚する。

H類の56はピット群の出土遺物で唯一の図示し得たもので、口縁部径と胴部の規模がほぼ同様である。口縁部はあまり開かず、体部はやや扁平であるが球形に近い。62は体部外面を細かく施削りしているが、内面には手ずくね痕がのこる。61は手ずくねの小形品である。

F類（図11-59・60）としては、球体に近い体部で丸底のものがある。59は直線的に開く長い口縁部を持つも

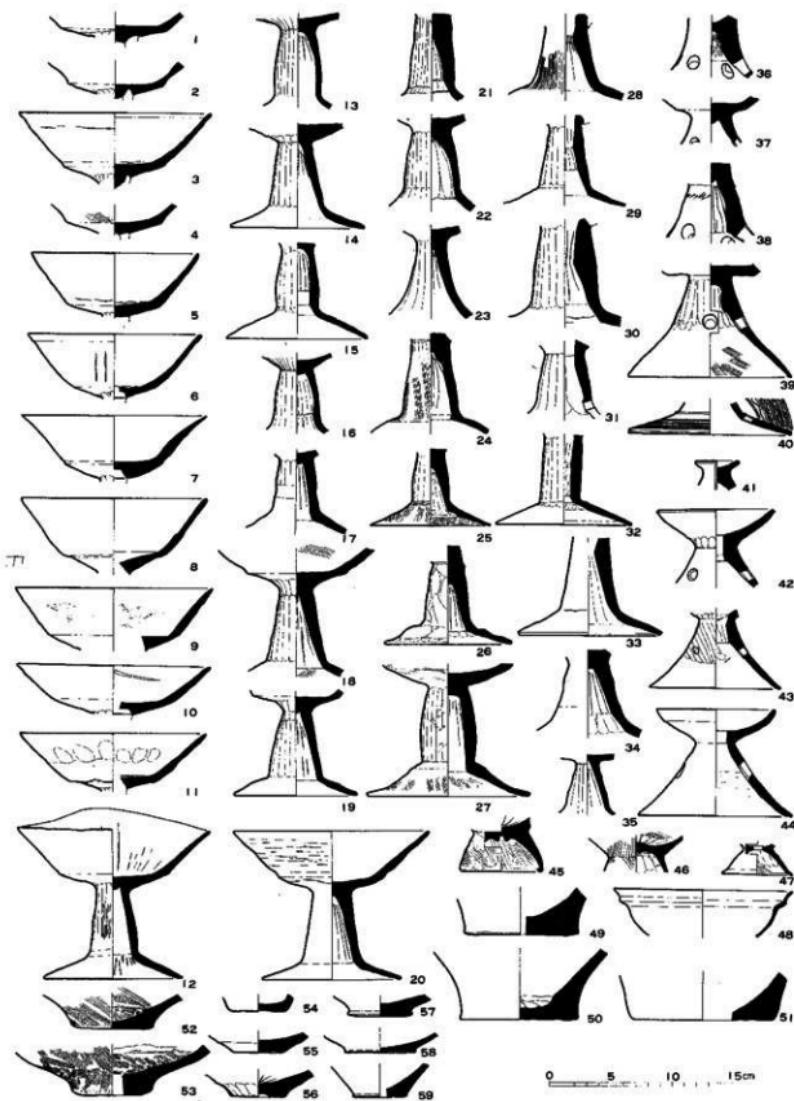


図12 第2層下部出土遺物実測図(2)

ので、口縁部及び体部外面は範磨きしている。60は短かい口縁部がやや内側にカーブして開き、頸部は指押えしていく凹む。体部は縱方向に刷毛目調整し、底部は粗く範削りしている。

46もこの類であろうが、「く」の字形の頸部と球形になると思われる体部を持つ。口縁部から体部にかけて細かく範磨きしている。

その他、57の細頸小型壺形土器が出土している。

〔鉢形土器〕

a. 土師器（図12-48）

口縁部が二段に屈曲して外方に開き、端部は丸く終る。器壁は薄い。

b. 弥生式土器（図11-58）

口縁部は短く垂直に立ち、体部は中程よりやや上方で最大径を取るが張りは小さい。底部は上げ底ふうとなっている。体部外面は細かく刷毛目調整している。

〔器台形土器〕

いずれも浅い碗形の杯部を持つもの（A類（図12-42～44））で、口縁端部は単純に終るが、42は面を取り、44は丸く終る。脚部は内湾しながら開き、43では端部を丸く、44では面をとって終る。いずれも中程より上方に3個の円孔を穿っている。口縁端部が屈曲するB類はない。

〔高杯形土器〕

a. 土 師 器

杯部と底部との境界が稜を取って屈曲し、口縁部が大きく外方へ開くものであるが、図12-6・7がわざかに外反する他は、直線的である。脚部は、図7-36～39が内湾して広がる他は、すべて、筒部からするとどく屈曲して據部につながる（図12-12～35）。12～35では脚部外面を縱方向に範削りしていく細かい面を取るものが多い。24・25・27・28では刷毛目調整痕が部分的に遺存する。また、筒部内面には絞り痕が遺存する。25・27では据部内面を刷毛目調整している。いずれも透しは持たない。

b. 弥生式土器（図12-40）

脚部の破片で、外面に平行直線文、連弧文、縦溝状文、刺突列点文等を密に配している。

〔瓶形土器〕

小型の脚台を付したもの（図12-47）が1点みられる。脚台は端部を外反させた低いものである。

〔そ の 他〕

笠形の壺形土器（図12-41）、菱形品の脚台部（図12-45・46）、壺あるいは菱形土器の底部（図12-48～59）等がある。

III. 第2層上部

〔壺形土器〕

a. 土 師 器

A類（図13-1～40）にはV類が最も多く、I・II・III類もみられるが極端に少ない。

I類（1～5）は下層のものと同様に体部外面を範描きしていく、器壁も厚味がある。4・5では体部内面を範削りしている。肩部はややナデ肩であるが、胴部はよく張るようである。

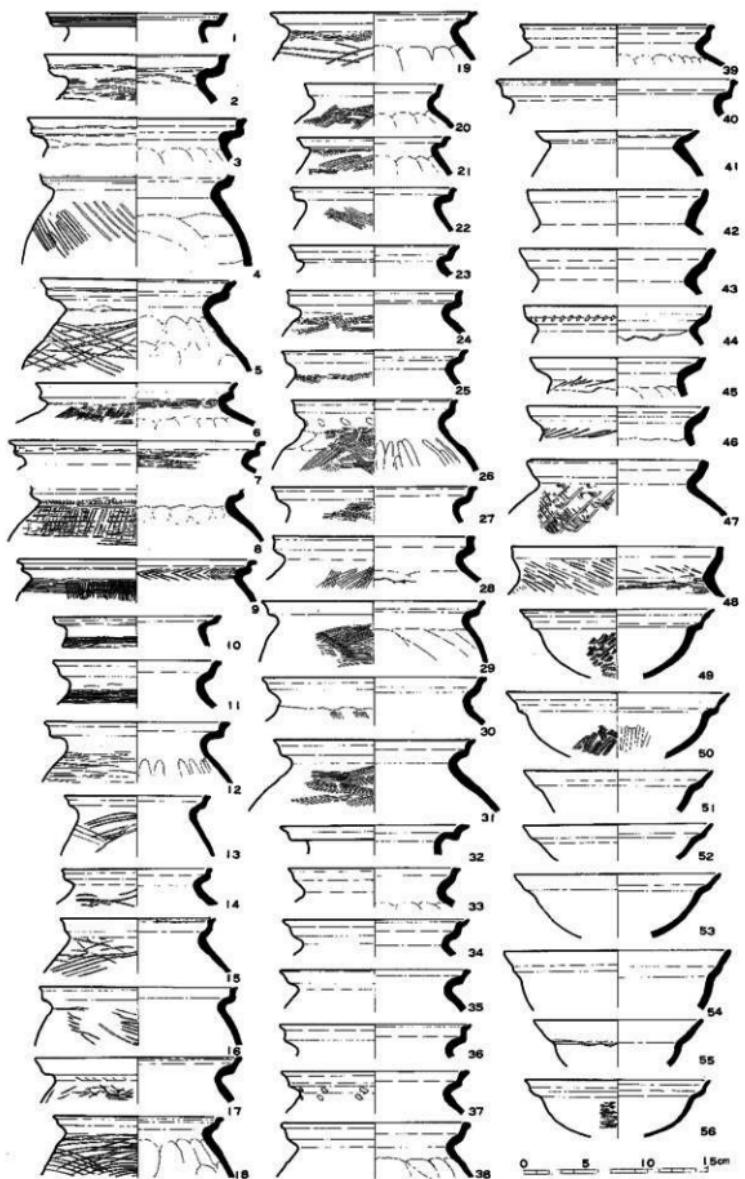


図13 第2層上部出土遺物実測図(1)

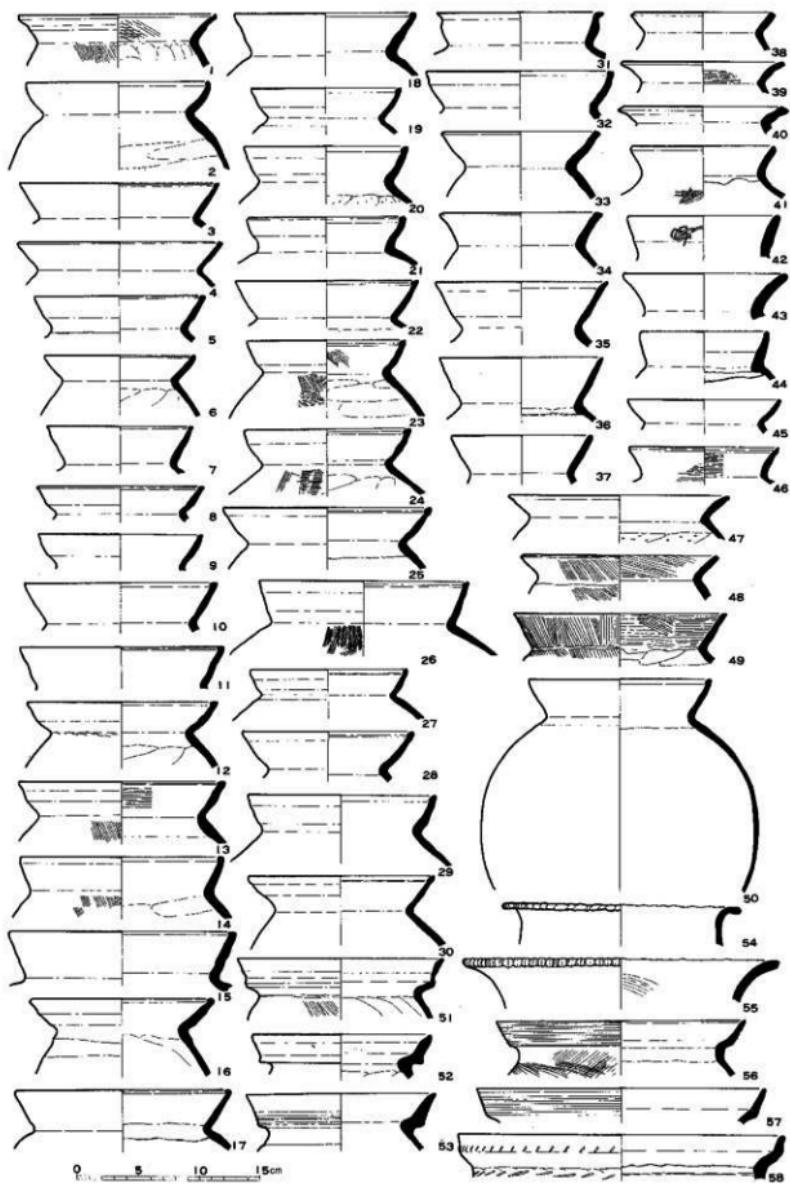


図14 第2層上部出土遺物実測図(2)

II類(19・34・36)は折り曲げた口縁端部は斜上方に向き、34・36では端面が凹む。19では体部外面で、頸部に刷毛目、肩部に範描きがみられる。

III類(6)は体部外面を細かく刷毛目調整するとともに、頸部内面にも横方向に刷毛目が残る。肩部はよく張るようである。

V類(11~18・21~33・35・37~40)は最も量的に多いもので、体部外面を範描きするもの(12~19)と刷毛目調整するもの(20~31)とが半ばする。11では肩部に平行沈線文が施されている。体部内面は知り得るものはすべて範削りしている。

第2層上部で出土し、下層では出土しなかったものに図13-7~9(Ⅵ類)がある。口縁部の屈曲が非常に鋭く、端部も極端に屈折させて外方へ引き出している。端部は丸く仕上げている。7では口縁部外面にクサビ形の刺突文をめぐらせ、9では頸部内面に羽状の刺突文がめぐる。8・9の体部は格子状に範描きしている。7は不明だが、頸部内面を横方向に範描きしている。

B類彫形土器ではII類(図14-2~26・50)とVI類(図14-27~30)が出土している。VI類では、やはり口縁部外面が3段に凹凸する。50でみると、体部は球形を呈す。

C類(図14-52・53・56・57)ではI類ではなく、II類(56・57)のものと、口縁部の下半分に3条の沈線を施すもの(III類(53))と無文のもの(VI類(52))とがある。III・VI類はともに器壁が厚い。VI類では口縁部の屈曲部が突帯状に稜を取る。また、口縁端部内面は範削りして面を取る。

D類(図13-41~48、図14-58)は、S字状に、内寄して開く口縁部を持つもの(44)では口縁部下端に刻みを施している。42・43は口縁端部を丸くおさめ、45~48では面を取る。45・46には頸部に範描きの調整痕があり、47には体部に範描調整痕がみられる。56は大形であるが44に近似した形態を取る。56では頸部を範押えして調整している。

E類(図14-32~49)では、B類彫形土器に似て、「く」の字形の頸部と内側へカーブしながら開く口縁部を持つもの(32・33)がある。口縁端部は肥厚しないが、とともに面を取り、32では中央が凹み、33は外傾する。

48・49は「く」の字形の頸部内面が稜を取って屈曲し、口縁部は直線的に開いて、端部は面を取る。口縁部から体部にかけて刷毛目調整し、口縁部内面をも刷毛目調整している。

35・36はまっすぐ外上方に開く。端部は尖り気味に終る。37も同様であるが、短かく、端部は丸味をもって終る。

34はやや外反気味に開き、端部は外傾する面を取る。また頸部内面は稜を取って屈曲する。38~40も頸部内面で稜を取って屈曲するが、口縁部は38が直線的、39が外反、40は凹凸のある面を取り、端部で外方へ肥厚する。

42・44は短頸の直口形のもので、42は口縁端部を丸くおさめ、外面に範記号様のものをみる。49は口縁部上半を押えて凹ませ、やや内寄気味となる。口縁部の接合部が突帯状の稜を取って残る。

45は内側へカーブしながら開く口縁部、46は口縁端部が内傾し、尖る。

41は「く」の字形にゆるやかにカーブする頸部と短かく、開きの小さな口縁部を持つ。

b. 弥生式土器(図14-54・55)

II類部を押えて凹凸面を持たせるものがある。54は口縁部が極端に外反し、肩部は張らない。55はゆるやかに外反する。

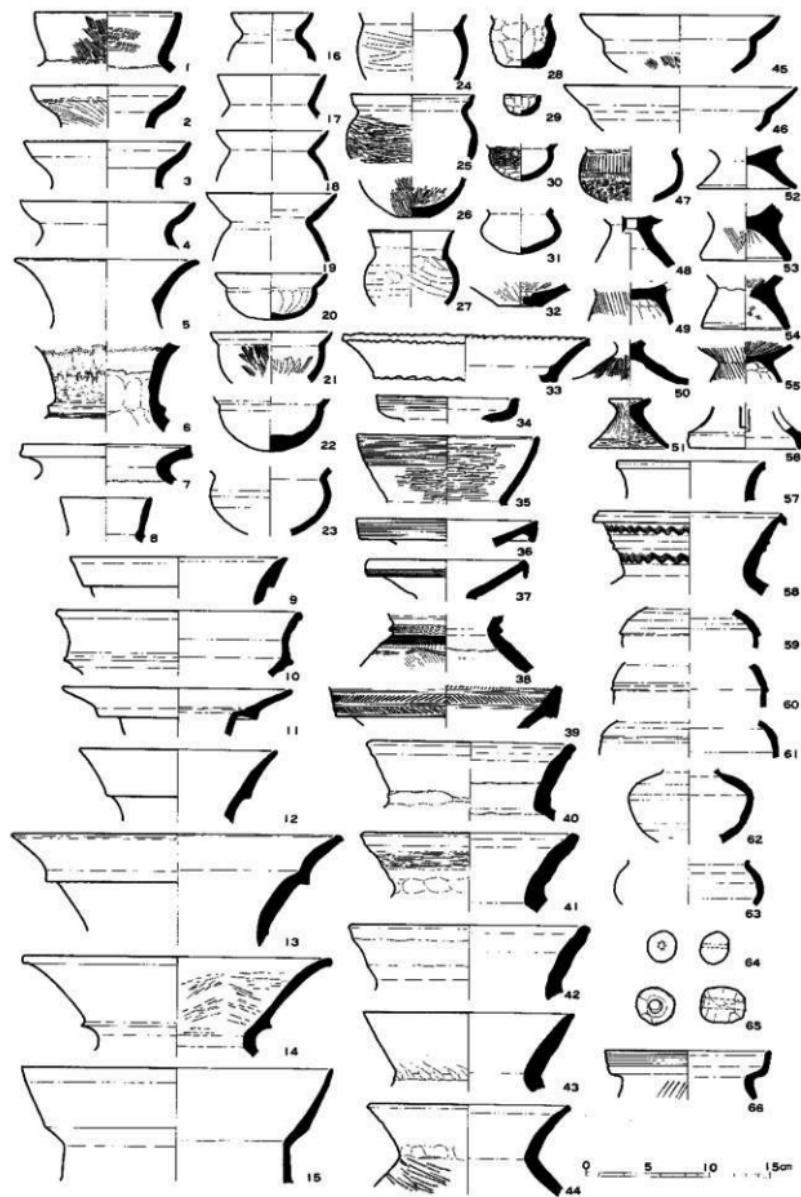


圖15 第2層上部出土遺物實測圖(3)

〔臺形土器〕

a. 土師器

A類、B類の良好な資料はない。

C類については1点ある(図15-33)。屈曲して大きく外側へ開く口縁部の下端部に圧痕を施し、さらに、肥厚させて面を取った口縁端部の上下端を刻んでいる。

D類も1点出土している(図15-6)。窓帯の下端に3条以上の平行沈線文が加えられている。

E類(図15-7)は屈曲の大きい頸部で口縁端部は上下に肥厚し、窓面は凹む。

G類(図15-10~14)には様々な形態のものがある。10は口縁部の開きは小さく、中程より上部で外方へ屈曲している。11は口縁部が二段に屈曲するものであるが、上段は外面で窓帯状の稜を取るだけで、内面は屈曲しない。12は内外面の屈曲がほとんどなく、外面で窓帯状の稜をとるにとどまる。13は内窓しながら開く頸部より屈曲して開く口縁部を持つもので、屈曲部の外面は窓帯状に突出し、内面も一線によって画されている。14は頸部は短かく、口縁部が長がく、大きく外反する。口縁部は外面が窓帯状に稜を取って区別されているが、内面はほとんど屈曲しない。なお、13では口縁端部が肥厚し、14ではさらに外反する。

小型丸底壺であるH類(図15-16~19・24・27・28・31)は16では口縁部が内側へカーブしながら開き、頸部の屈曲はゆるやかである。17は直線的に開く口縁部と内面で稜を取る頸部を持つ。18は比較的口縁部の開きが大きい。19は体部の肩部はナデ肩で、あまり張らない。24は球形の体部と内面で稜を取る頸部を持つ。27は球形の体部で、口縁部は開きが小さい。体部の外面を箆削りしている。28は手すくねの小型壺で、底部は平底となっている。31は算盤形の体部を持つ。

口縁部が単純に終るF類(図15-40~44)は、いずれも器壁が厚い。40~42は口縁部の内外面に凹凸があり、端部は丸く仕上げている。40では口縁部の内面と頸部の外面上に貼り付け痕がよくのこっている。41では頸部外面に指押え痕、口縁部外面に刷毛目調整痕がみられる。43は口縁端部が尖り気味に終り、頸部外面に接合部の押え痕がのこる。44は「く」の字形の頸部と外反気味の口縁部を持つ。口縁端部は内外から押えて団ませている。頸部外面に接合部の押え痕、体部外面に箆描き調整痕がみられる。

b. 弱生式土器(図15-34~39・66)

いずれも後期のもので、34・66は屈曲して水平に開く頸部から、さらに屈曲して垂直に立ち上る口縁部を持ち、口縁部外面に3~4条の凹線を施している。36・37は外窓しながら大きく開く口縁端部を下方へ折り曲げて幅広い面を取るもので、36では5条の直線文、37では下半部のみに4条の直線文を施す。38は36・37類似の口縁部を持つと思われるもので、頸部に刻みを施した窓帯を貼り付け、肩部に8条の直線文、刺突列点文、2条の波状文を配している。39は口縁部が下方へ垂下して幅広い面を取るもので、その内外面に2条の直線文と刺突列点文を交互に配している。35は長頸臺形土器で、口縁端部外面に10条の直線文を施している。器壁の内外面を丁寧に箆磨きしている。

〔鉢形土器〕

3つのタイプがある。A類(図13-49~54・56)は口縁部が二段に屈曲するもの。口縁端部が外反して尖り気味に終るもの(54)、口縁端部は外反するが、指押えにより外面に凹凸面をなすもの(49・50)、直線的で丸く終らせるもの(51~54)等がある。49・50では体部外面を細かく刷毛目調整し、56では箆磨きをしている。また、50では体部内面を縦方向に箆磨きしている。51~54では口縁部の屈曲が弱く、稜は明瞭でない。

B類(図13-55、図15-20-22・30・45・46)はA類に似た体部を持つが、頸部よりただちに底部に至らず、わずかに張りを持つ。頸部は「く」の字形に屈曲し、内面で稜を取る。20-22・30は小形品で、体部は小型丸底壺に近いが扁平で、肩部はほとんど張らない。口縁部は20・21では短かく、内側にカーブしながら開く。20・21の体部内面は箝削り、21の外面は刷毛目調整している。30では体部外面を磨き、底部は箝削りしている。55・45・46は大型品で、口縁部は内側へカーブしながら大きく開き、端部は丸く終る。

C類(図15-29)は丸底の土器で、予ずくねである。

[器台形土器]

漏斗形のA類(図16-6~8)は、杯部の口縁端部がわずかに内方にカーブするもの(6)、心持ち内側へカーブするもの(7)、直線的に開き、端部でわずかに外反するもの(8)がある。7・8では、脚部が「ハ」の字形に開き、7では円孔が穿たれている。7の杯部、脚部の外面は磨き、8の杯部内面に刷毛目調整痕がみられる。

B類(図16-1~5)では口縁端部が内寄して立ち上り、端部を尖らせて終るもの(2・3)、口縁端部の屈曲が弱く、不明瞭な後を持って開くもの(4・5)の他に、端部が小さく折れて立つもの(1)がある。

脚のみの破片(図16-9~15)についてみると、14では内寄して開き、端部は面を取る。外面は箝削りし、3孔を穿つ。15は端部を丸く終らせる。内面は刷毛目を施し、3孔を穿つ。

[高杯形土器]

杯部で底部より稜を取って直線的に開く口縁部を持つもの(図16-16~20)及び、脚部で裾部が屈曲して極端に開くもの(図16-28~35)の他に、碗形の杯部を持つもの(図16-21~24・72・73)がある。21は浅く、口縁部は大きく開く。23は内側にカーブしながら開く深いもので、底部とは稜を取って接続する。外面を丁寧に磨きする。脚部は内寄しながら開き、6孔を穿つ。外面は箝削りしていて、面を取る。22も同様のタイプと思われる。24は口縁端部に面を取り、端部内側に刻みが施されている。また、外面に4条の直線文と瓜形の刺突文がめぐる。72・73は大型品で浅い。端部は面を取り、72は水平、73は内傾している。

[甌形土器]

図15-32の1点で、平底のものに1孔が穿たれている。

[その他]

笠形の蓋形土器(図15-50・51)がある。50は大きく開き、外面を刷毛目調整している。51は開きが小さく、外面を磨きしている。

図15-52~55は甌形土器の脚台部である。52は丈が低く、脚は内寄気味に開く。53は直線的で、端部は内側に肥厚する。53は外寄気味で、端部は内側に小さく肥厚する。

[須恵器]

第2層上部では須恵器が出土している。高杯(図15-56)、壺(図15-57・58・62・63)、杯蓋(図15-59-61)等である。

高杯(56)は短脚の一段透しで、端部は内側に屈曲し、屈曲部に突帯状の稜を取る。

壺では、内寄気味に立ち上り、端部で面を取るもの(57)と、直線的に外方に開き、端部を上下に肥厚させるもの(58)とがある。57は無文、58は2条の波状文が施されている。62・63は壺形のもので、62は肩部がよく張る。63はややナデ肩である。

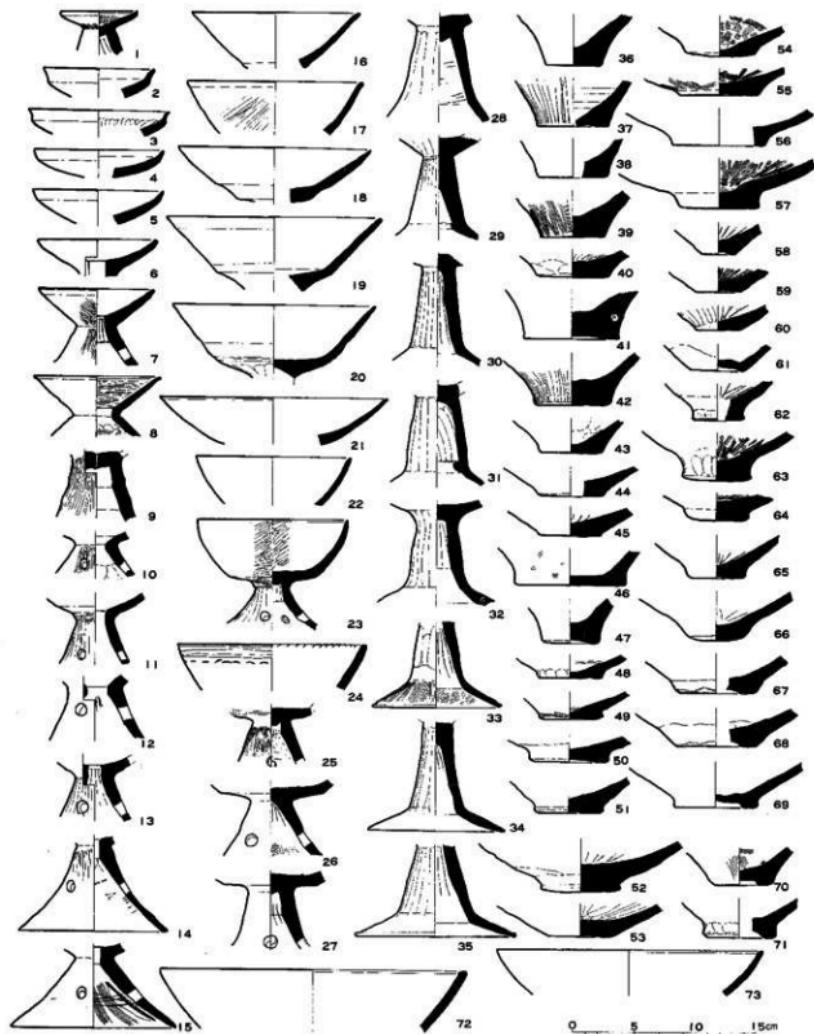


圖16 第2層上部出土遺物實測圖(4)

杯蓋では、いずれも縁を取って天井部と口縁部を区別しているが、59・60では突堤状に縁を取っていて、やや古式である。

IV. 第1層 (図17・18)

第1層は重複等により搅乱を受けているものであり、大半が下層より出土しているものである。ここでは、第1層で特徴的なものだけを取り上げて記述することにする。

A類菱形土器で、口縁部の開きが小さく、また、ほとんど屈曲を持たないもの(IX類(図17-10~15))がある。口縁端部は面を取るもの(15)があるが、ほとんど丸味を持つ。口縁部内面はわずかにカーブする程度であり、外表面は指押えにより、端部が凹む。Ⅷ類に近似するが、内面は凹まない。体部外面を範描きするもの(10)、肩部に直線文を施すもの(13~15)等がある。

D類菱形土器では、腹部が屈曲して水平に開き、口縁部が内傾するもの(図17-42・43)がある。42は、口縁部外面に刺突列点文、肩部に直線文を施す。43は、口縁部外面に刺突文を施す。

須恵器類では杯身(図18-46~48)がある。

46は口縁部が短く内傾し、端部は丸く終る。受部は斜上方にのびる。47は口縁部が長く、やや内傾し、端部は面を取る。受部は水平で、46に比べ古式である。48も同時期ものであろう。これらは、第2層上部のものと時期的に合うものであろう。

ハ. 木製品 (図19)

すべて第3層よりの出土であり、主に、その下底部より出土した。

[弓]

2は丸木であるが、幅1.3cmの面取りをしている。端部は茎状に削り出している。

3は長さ58.4cmの短弓で、横断面は鉢彫形を呈している。両端は弧状削を削り込んで掛けを作っている。

4はダ円形のもので、端部は2面を削って先細りにしているだけである。

6は中程でひし形、端部付近で扇形を呈す。全面を削って面を整えている。端部は三角形状に削り出して面を取っている。

8も2・3・6と同様、端部を三角形状に削り出しているが、横断面ダ円形で、面を削っている。

9は不整四角形の角材を用いており、両端部は欠失している。

[田も綱]

2点出土している。11はほぼ完形で、三つまた枝を利用している。把手は横断面が鉢彫形を呈し、端部は環状に削り出している。把手は削って面を整えているが、他は自然の枝をそのまま利用している。把手の長さ21.6cm、幅約3.2cm、厚さ約2.3cm。現状での長さは76.1cm。

10は把手、環状部とも削って面を整えている。把手は削り込んで細くし、環状部と区別している。把手の長さは13.5cm、幅1.8cm、厚さ1.7cmを計り、横断面は鉢型を呈す。

[その他の]

1は溝状にえぐって頭をつくり出し、以下を先細りにしている。頭部で径6.8cm、遺存端部で3.1cmを計る。

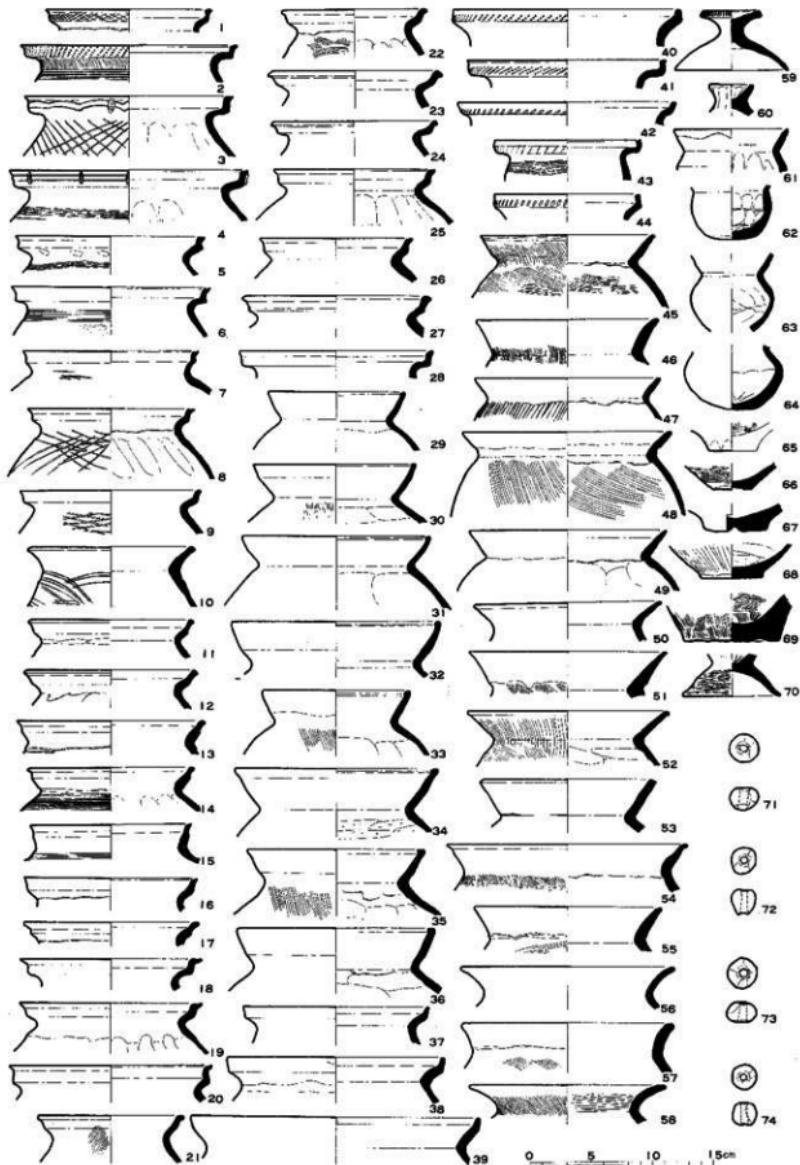


図17 第1層出土遺物実測図(1)

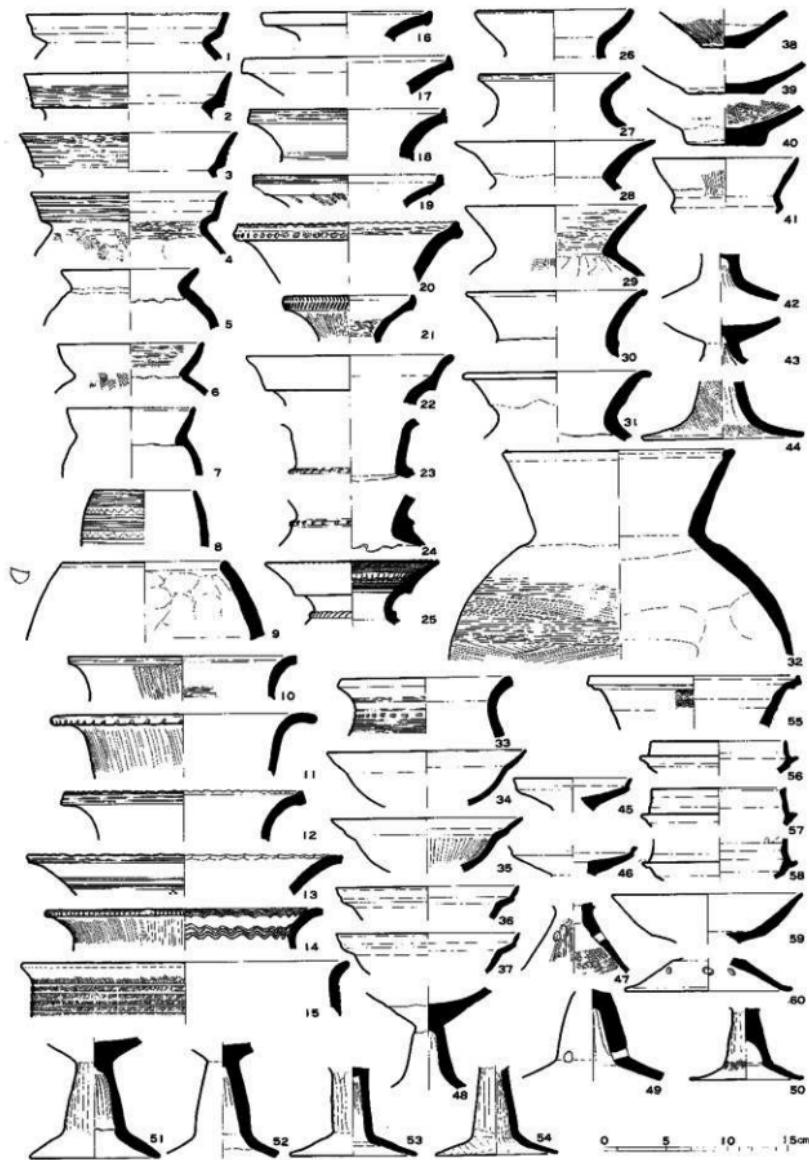


图18 第1层出土遗物实测图(2)

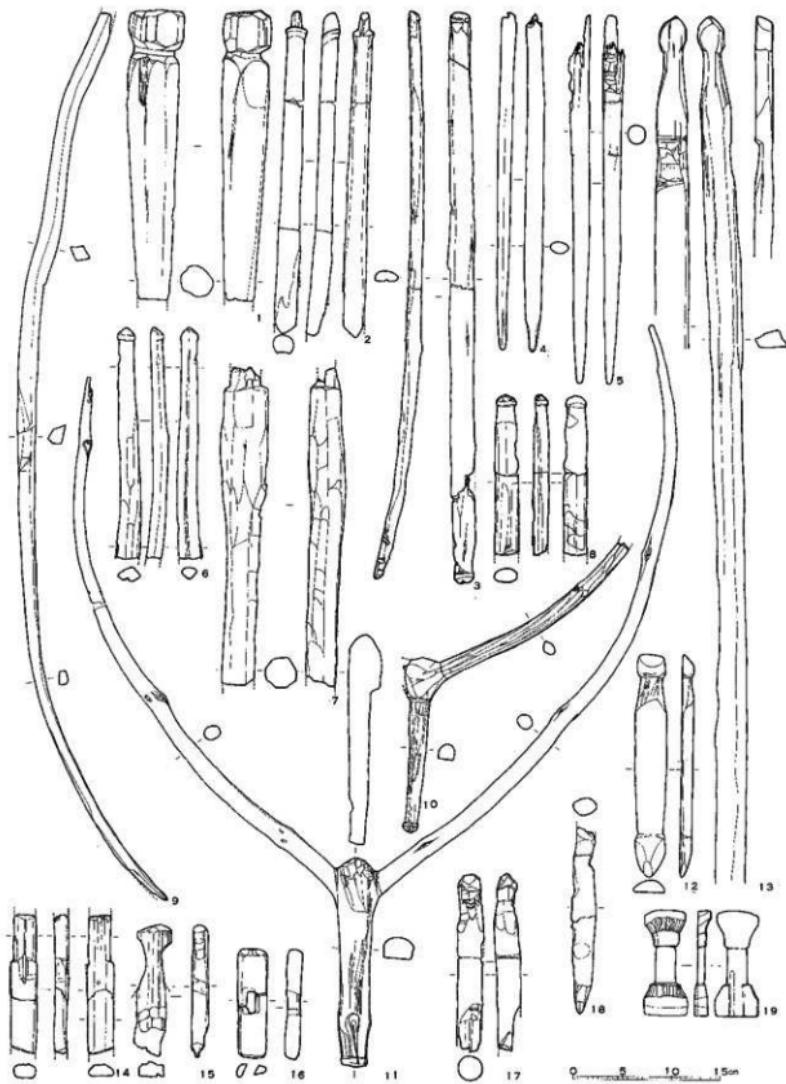


図19 第3層出土木製品実測図

横断面は不整円形。頭部は削って面を取っている。現存長29.8cm。

5は横断面円形で、端部は尖る。遺存している他端部で幅1.2cm程の凹部を2カ所に穿っている。径約1.8cm。

7は、茎状に一端を削り出したもので、茎状部に近い側は幅広くなっている。全面を削って整えている。茎状部はダ円径で、長径3.2cm、短径1.9cm、以下は上部で長径4.9cm、短径3.8cm、下部で径3.3cmを計る。

12は完形品で、一端は亀頭状に、他端は長方形に削り出したもの。全長23cm、厚さ1.2cm、幅3.3cmを計る。

13は木剣状のもので、端部を亀頭状に削り出し、端部より13cm程のところで、片面を削り込んでいる。扁平な角材である。幅約3.4cm、厚さ約1.8cm、長さ90cm以上。

14は横断面台形で幅の広い部分と横断面長方形で幅の狭い部分をつくり出したもの。幅の広い部分に一孔がみられる。厚さは1.4cm、幅は2.6cm及び2.3cmを計る。

15は把手と思われる部分の残欠である。

16は長さ11.3cm、幅3cm、厚さ1.5cmで完形品。中央に長さ2.3cm、幅0.9cmの孔が穿たれている。

17は横断面円形(径2.5cm)で、一端は削り込んでいる。

18は自然木の一端を削って尖らせたもの。

19は両端を台形状に削り出したもので、長さ10.9cm、幅は一端は4.2cm、他端は4.4cm、中央部で2.1cm。厚さは、欠失していて不明である。

二. 石 器 類

第1層、第3層及び表採品である。

石斧(図20-10~15)はすべて磨製である。刃部で丸くおさまるもの(13・15)と開き気味になるもの(14)とがある。刃部幅及び厚さは、11が5.1cm、2.4cm、12が約6.8cm、約4cm、13が5cm、2.5cm、14が6cm、2.4cm、15が6cm、約4cm。

刃器(図20-1)は幅4.3cm、長さ3.1cm、厚さ1.3cmを計る。ダ円形で約半分に刃部がつく。

石鎌(図20-3)は横断面ひし形を呈した無茎の打製品である。

石錐(図20-5)は自然石の両端を打ち欠いたもので、長径5.3cm、短径4cm、厚さ1.2cm。

扁平片刃石器(図20-4)は長さ3.5cm、幅2.7cm、厚さ0.7cmで、やや弯曲し、横断面は台形を呈す。

図20-16~18は円形の不明石器

図20-19~23は砥石で、20~23には磨痕として溝状のものが残っている。

ホ. その他の遺物

銅鏡(図20-6)、管玉(図20-7・8)、小玉(図20-9)等が出土している。

銅鏡は長さ4cmの小型品。管玉は碧玉製で1点は長さ3cm、他は2.1cmを計る。

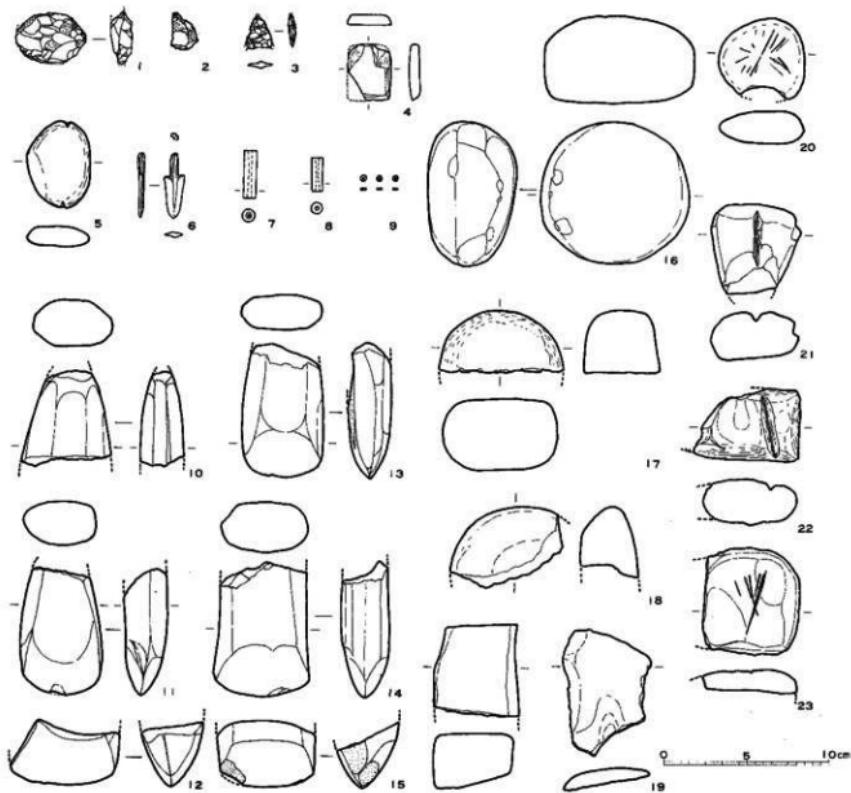


図20 石器・銅鐘・管玉・小玉実測図

第3層——1・4・8・11・12・17・19

第1層——2・3・6・7・14・16・18・20・21

表 採——5・10・15・22・23

ピット内——9

おわりに

今回の調査は矢倉川中小河川改修に伴う極く限定された範囲の調査であって、旧人江内湖に係る遺跡の全容を明らかにすることはできなかったが、調査地点が内湖の旧汀線部に当り、内湖辺に立地する遺跡の一端を知ることができた。旧陸地部での掘立柱建物等の遺構は、およそ、古墳時代中期末に係るものであるが、この時点で、標高84.6m等高線が内湖の範囲を示すものであり、以降において、内湖底に黒色のいわゆるスクモの堆積があつて、陸化及至湿地化していったことが伺えた。ただ、遺構については、淡黄色の乾固な粘質土層を掘り込んで作られており、それが、陸化及至湿地化した内湖部分にはほとんど及んでいない。また、調査地点の北側の旧矢倉川が形成したデルタ地帯の砂礫層がここでは見られず、従って、遺構の立地は南方佐和山丘陵の末端微高地に当り、少なくとも、古墳時代中期においては、生活空間が内湖には及んでいないと考えられる。遺構としては、掘立柱建物、溝、ピット等であるが、これらに対する生産基盤が内湖に求められていたであろうことは論を待たないが、それが何であるかについては、遺構、遺物からは確証がない。ただ、土錘、木ノ実の出土、また、第3層出土であるが、田も網、弓等の木器を出土したが、農耕に関連するものを出土していないことは注意すべきであろう。

調査地域における内湖辺の変遷は上述でも明らかであるが、その過程で、4層にわたる遺物の包含層が形成されている。まず、内湖がスクモによって埋り（第3層）、この時点で遺構が形成されるとともに、これに対応すると考えられる遺物の集積（第2層下部）ができ、遺構の廃絶後に、内湖部分をも覆って第2層上部の堆積が行なわれている。第1層は後世の擾乱である。第3層から第2層上部までの包含層は純粹なものではないが、特に土器類において、層位毎の形態的な差異の伺えるものがあった。最後に、この点について、特に土師器の主なものについて若干触れておくことにする。

層	3	2下	2上
I	38.5	6.2	18.5
II	16.5	31.2	10.8
III	16.5	0	3.6
IV	11	6.2	0
V	11	43.7	57.6
VI	0	12.5	0
VII	0	0	10.8

表1 (%)

まず、變形土器であるが、A～E類の5類が見られる。このうち、口縁部が単純に終るE類を除いて、A・B両類が各層にわたって、量的に最も多く見られた。

A類はいわゆるS字状口縁を持つもので、VI類としたやや異形のものを除いて7類について、表1に図示し得たものを百分比（端数は四捨五入）で表わした。各層単独のものとしては、第3層のⅢ類、第2層下部のⅣ類、第2層上部のⅤ類がある。

I・II・V類は各層より出土しているが、I類は第3層、II類は第2層下部、V類は第2層下・上両部で最も多く出土している。IV類は第2層上部での出土ではなく、第3層から第2層下部へと漸減する状態で出土している。これらのことから、I・III・IV類→II・V類→V・V類といった変遷がたどり得る。

各層の2～3類についても細分できるが、ここで層位的に言える範囲にとどめておく。

層	3	2下	2上
I	20	0	0
II	50	58	85.8
III	30	11.6	0
IV	0	29	13.2

表2 (%)

B類の百分比（端数は四捨五入）は表2の通りである。I類は第3層からの出土のみであり、II類は各層より出土しているが、上層ほど量的に多くなる。III類は第2層上部よりの出土ではなく、第2層下部で漸減し、IV類は逆に第3層の出土がなく、第2層下部で漸減している。B類はこの百分比から見る限り、I→III、II→VIと変遷しているといえる。なお、IV・V類については、これら4類とは別系統のものと

考えられるので、ここでは除外した。

C・D類については、ともに第2層下部からの出土はない。ただ、C類については、第3層、第2層上部の2層から出土しており、上・下両層で形態状差異が認められる。

次に、壺形土器ではF類を除いて、7類がある。図示したものの個体数は表3のとおりである。この表からも

層	3	2下	2上
A	4	2	0
B	2	0	0
C	1	0	1
D	2	0	1
E	2	0	1
G (1)	3	5	
H	0	3	8

明らかなように、B～E類は第3層、A類は第3層・第2層下部、G・H類は第2層上・下両部から出土しており、A・B・C・D・E→G・Hと変遷をたどれる。

さらに複合口縁部をなすG類については、大きく外反して開く口縁部をもつ図15-11・12の類は第2層下部では出土していない。小形丸底壺であるH類は第2層下部から出土しているが、口径と胴部最大径がほぼ等しく、この層のものは体部はやや扁平さを残しており、第2層上部のものでは、口径が小さく、体部が球形のものが多い。

表3 (個体数)

鉢形土器について見ると、第3層及び第2層下部からは各1点のみで、口縁部が屈曲しない類では皆無である。第3層及び第2層下部のものが、口縁部が継ぎ取って二段に屈曲するに対し、第2層上部のものでは、口縁部の屈曲が非常に弱く、器壁に比較的厚味があって、口縁端部を丸くおさめたものが図示したもの6点中4点を占っている。

器台形土器、特に小型器台形土器では、第2層下部のものが、すべて、浅い塊形を呈するに対し、第3層のものでは、浅い皿形の杯部の口縁端部を屈曲させて立ち上がらせており、両者の層位的な形態差が表されている。第2層上部のものでは、下層のものと差異のあるものは見られない。

高杯形土器については、杯部が底部から口縁部へ屈折して移行し、脚部が筒部から水平近くに大きく広がる裾部に移行するものが第2層上・下両層より出土しているのに対し、第3層からは杯部の破片1点のみ図示し得た。

さて、以上から、壺形土器B類については、口縁端部が丸くおわるもの(Ⅲ類)から断面が三角形の突堤状になるもの(Ⅱ類)さらに、内側に肥厚部が大きく内傾するもの(Ⅳ類)へと変遷する傾向がうかがえた。さらにⅥ類が第2層下部からはじめて出現し、肥厚部が外方にあるⅠ類が第3層のみに出土している点も注意される。

壺形土器では、小型丸底壺(H類)及び口縁部が二段になるG類が第2層下部より出現している。

器台形土器では、小型器台形土器が主流をなすが、第3層のものは杯部の口縁端部が屈曲して立ち上るのに対し、第2層では口縁端部が単純に終っている。

鉢形土器も第3層・第2層下部からの出土は非常に少なく、第2層上部より急増し、かつ、口縁部が二段に屈曲するものも、その屈曲度が非常に弱くなっている。また、口縁部が屈曲しないものでは、第2層上部が初現となっている。

これらの器形に対し、壺形土器A類はその量だけでなく、形態もやや複雑である。これをもう少し詳細になると、第3層では、I類とIV類は口縁部の形態が近似したもので、特にI類はすべて蹲描きによる整形痕を見る。また、頭部が水平近くに屈曲して開き、口縁部はほぼ垂直に立つ。これに対しⅢ類は「く」の字形の頭部とゆるやかにS字状にカーブす口縁部を持ち、その端部を丸くおさめている。また、その整形は刷毛目によっている。

第2層下部においては、単独出土の種類は口縁部の屈曲がほとんどなく、内外面を指揮えただけにとどまっている。整形は刷毛目による。一方Ⅱ類は「く」の字形の頭部からやや外方に開いた口縁部を持ち、その端部を外方に

折り曲げたように、極端に引き出し、その形態は、I類のものに似ている。口頸部の屈曲は弱くなっている。刷毛目整形が多い。

第2層上部では、IV類に近似するが、頸部が「く」の字形に開き、口縁部は外方に開いて、その端部を外方に肥厚させたもので、口頸部の屈曲は非常に弱くなっている。体部の整形は刷毛目と範描きが半している。V類は口頸部の屈曲が極端に強く、端部を丸くおさめている。器壁が非常に薄く、体部を範描き整形している。

これらの特徴からして、A類は3系統に細分できそうである。すなわち、①はI・IV類→II類→V類で、頸部が水平近くに屈曲し、口縁部が垂直に立ち上るもの（I類・IV類）から、頸部が「く」の字形に開き、口縁部がやや開き気味になるが、その端部を突出させるもの（II類）、さらに、口縁部が外方に開いて屈曲が弱くなるものの（V類）。②はIII類→VI類の系統で、頸部は「く」の字形で、口縁部もゆるやかなS字形を描くもの（III類）から口縁部がほとんど屈曲せず、外表面を指押えたにとどまるもの（VI類）への変化であり、さらに第1層のみの出土であるが、IX類としたものは口縁部内面がゆるやかにカーブするだけにとどまり、外表面を指押えて凹ませただけのものであり、この系統のVI類に統くと考えられる。③は第2層上部単独のⅦ類で、これに整形上近似したものに第3層のVI類があり、VI類→VI類の系統が考えられる。これらの3区分は整形法においても、①が範→刷毛→範と刷毛、②が刷毛→刷毛→刷毛、③が範→範であり、この点からも区別できそうである。

以上を表示すると表4の通りである。

これらはおよそ、層位による形態変遷の傾向を示すものである。

次に、これらの年代的位置付けであるが、このことは第2層下部で須恵器の出土がなく、第2層上部から出土している点に求められよう。第2層上部出土の須恵器は壺、高杯、杯蓋等であるが、高杯は短脚・一段透しであり、杯蓋は天井部と口縁部との境界に明瞭な稜をとっている。これらの特徴からみると湖北町四郷崎古墳出土のI類としたものに近似し、6世紀前半におけるものであろう。従って、第2層下部は6世紀前半に下らないといえよう。また、第2層下部出土の變形土器A類のVI類は安達厚三のIV類に相当すると考えられ、またB類のVI類が出土しあり、逆にI類の出土を見ない。奈良県上ノ井手遺跡井戸S E 030下層に似た出土状況である。さらに、小形丸底徹形土器が新たに出現しており、形態上、体部がやや扁平で、口径と胴部最大径が近似しており、上ノ井手遺跡井戸S E 030上層出土で須恵器を共伴するとされるものより古式の形態を残している。これらのことからして、第2層下部の出土のものは、須恵器出現直前にあって、いわゆる布留式の新しい段階に入るものと考えられる。これに

対し第3層は變形土器A類のIII類が安達のIII類に近似し、B類にIII類が含まれ、VI類の出土をみない等、第2層下部より古式であるが、比較的新しい段階から、變形土器C類や壺形土器A・B・C・D・E類等東海地方の元屋敷期や石塚期に含められるものを含んでおり、時間的なばらつきが大きい。一方、第2層上部では、下層出土のものを抽出除外した場合、第2層下部よりかけ離れた時期のものではなく、共伴した須恵器の年代をあてはめてよきようである。

以上、土師器の形式変遷を中心に、調査の結果について、若干触れた。土師器の形式変遷については、湖北地

	3層	2層下	2層上
A	I・IV	II	V
	III	IV	IX
	VI	VI	
B	I・III	II	VI
	C	○	
	D	○	
C	A	○	○
	B	○	
	C	○	
D	D	○	
	E	○	
	G	a	b
E	H	a	b
	A	a	b
	B		○
番台	a	b	b

表4 アルファベット小文字はa→bの変化を示す。○印は単独出土。

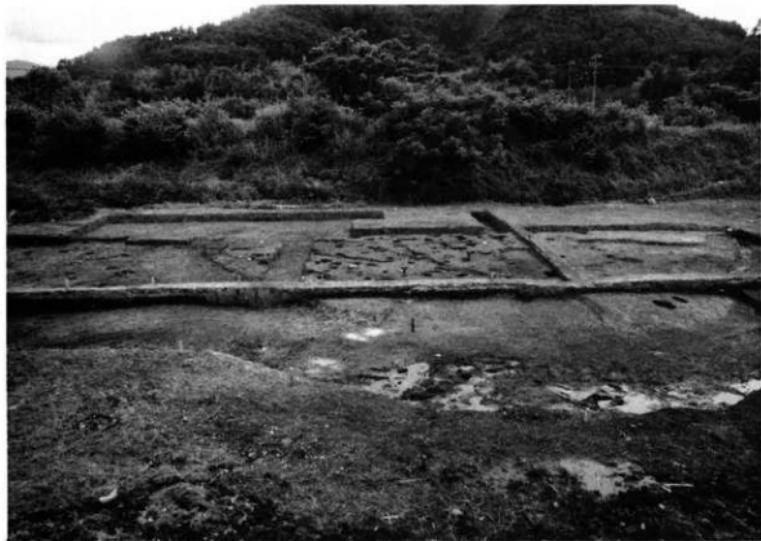
方において良好な遺跡が見当らず、比較検討が困難く、従って、ここでは、あえて、今回の調査において得られた層位的な関係においてのみ記述した。各層いずれも単純なものでないため、絶対的な層位関係は把握しきれないと、今後の調査のきっかけとなれば幸いである。また、旧入江内湖に係る諸遺跡の一端が明らかになったが、今回の調査を通じて、内湖の干拓によっても、まだ充分遺構の遺存している可能性の強いことを知り得た。

註

- ① 鬼柳邦・谷口義介「四郷崎古墳」（「北陸石動市近隣遺跡発掘調査報告書」Ⅱ、昭和51年）
田中勝弘「湖北地方の後期古墳の編年」（『近江地方史研究』第3号、昭和51年）
- ② 安達厚二・木下正史「飛鳥地域出土の古式土師器」（『考古学雑誌』第60巻第2号、昭和49年）
- ③ ②と同じ。
- ④ 最近、高月町円通寺遺跡において、いわゆる庄内並行期と考えられる一括遺物の出土をみて
いる（田中勝弘「高月町円通寺遺跡」（『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書』Ⅲ-Ⅱ、昭和51
年）。



遺跡全景（北西より）



遺跡近景（北より）



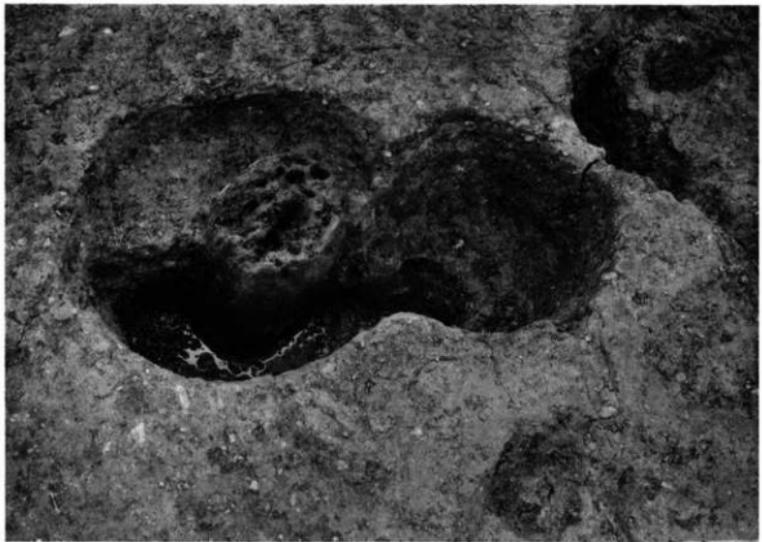
ピット群（東より）



ピット群（南東より）



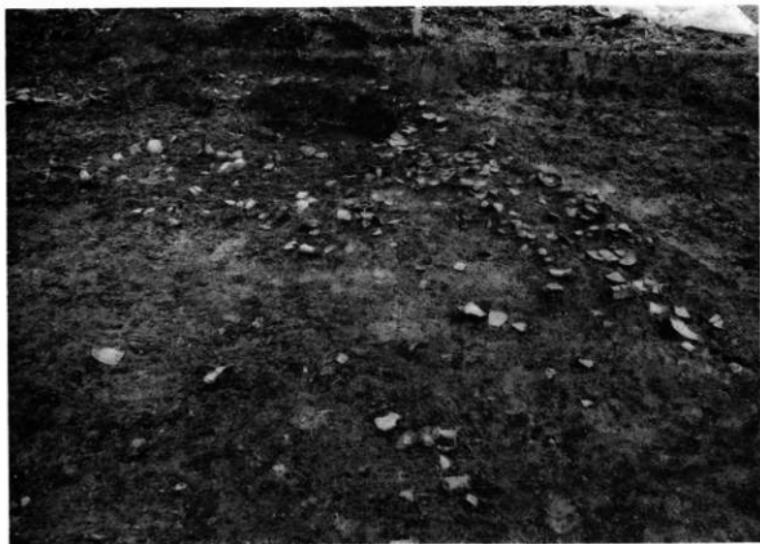
柱根及び支柱根遺存状態



柱根遺存状態



第2層下部遺物出土状態（南より）



第2層下部遺物出土状態（南より）



第3層木製品出土状態（東より）



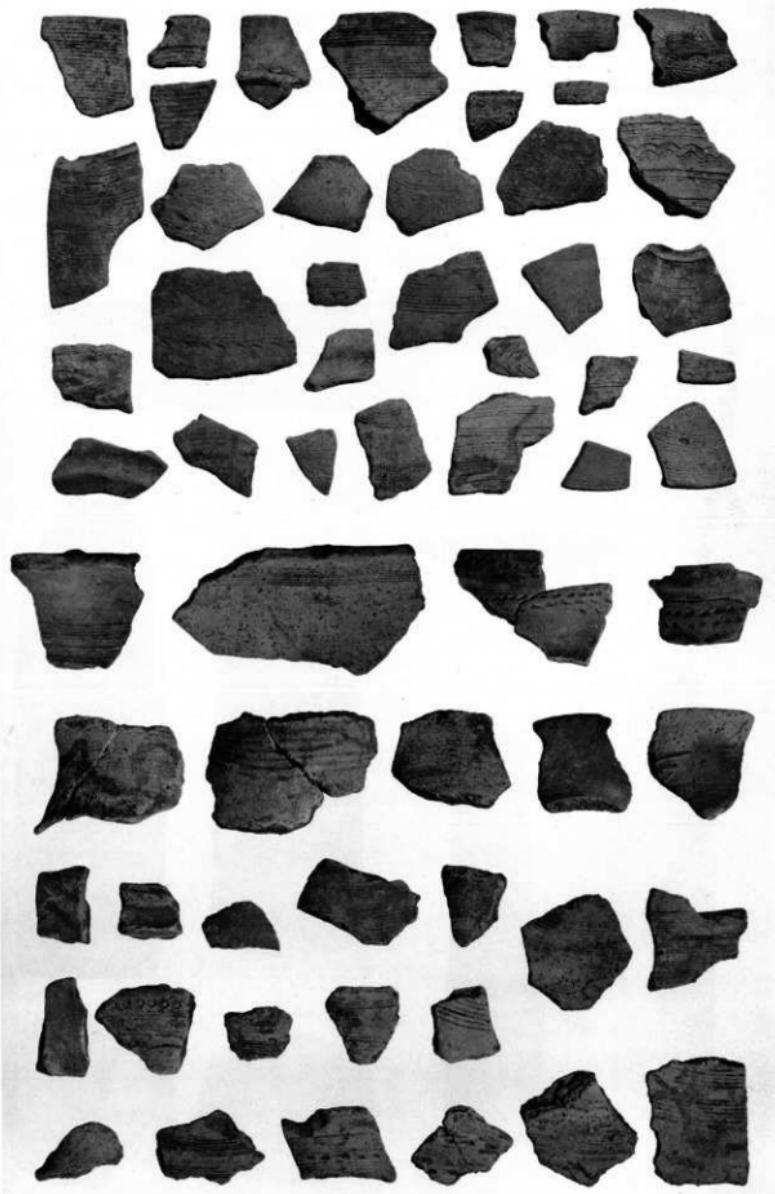
第3層土器出土状態



ピット内遺物出土状態（埴形土器）



ピット内木の実出土状態

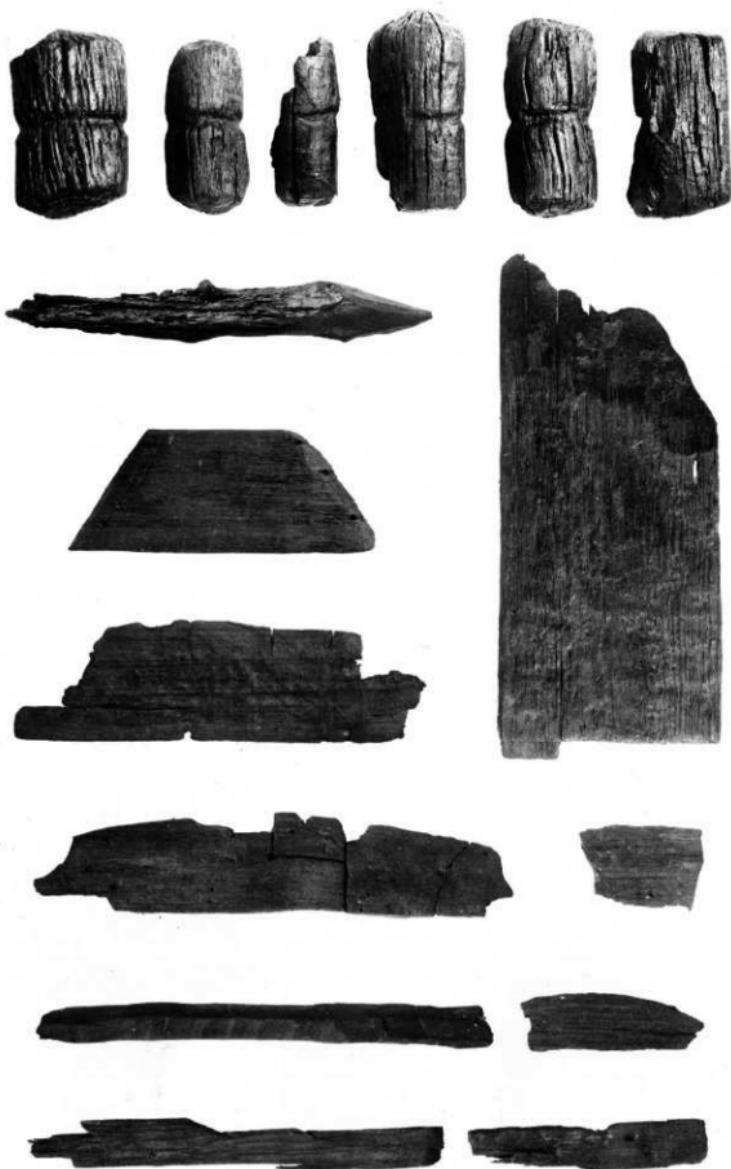


施文のある土器（上段第2層上部、中・下段第3層出土）

圖版八
造
物



第3層出土木製品及び柱根



第3層出土木製品



第3層出土石製品及び管玉・白玉・銅鏡

922
昭和52年2月25日 印刷
昭和52年2月28日 発行

矢倉川中小河川改修に伴う

入江内湖西野遺跡発掘調査報告書

編集 滋賀県教育委員会
発行 滋賀県教育委員会
財團法人滋賀県文化財保護協会

印刷 有限会社 真陽社
製本 京都市下京区油小路仏光寺上ル
TEL (075) 351-6034